HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	魯迅傳覚書 : 日本留学時代を中心として
Author(s)	猪俣, 庄八
Citation	北海道大學文學部紀要, 6, 139-174
Issue Date	1957-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33241
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P139-174.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

魯迅傳覺書

——日本留学時代を中心として——

猪俣庄八

魯迅傳覚書

——日本留学時代を中心として——

猪俣庄八

路は漫々としてそれ修遠，吾れまさに上下して求め索めんとす
—「彷徨」題辞—

まえがき
(一) 東京、弘文学院へ
(二) 仙台医学専門学校へ
(三) 二つの事件—医学から文学へ
(四) 『惜別』—結婚
(五) 「新生」の企劃と失敗
(六) 章炳麟（大炎）との出会い—光復会
(七) 「域外小説集」—日本文学との関連
むすび
附：「魯迅年譜補遺」（日本留学時代）

まえがき

魯迅の日本留学時代は一九〇二年（二十二歳）から一九〇九年（二十九歳）までのおよそ八年間にわたる。その間、彼は東京↓仙台↓東京の路線を辿ってその青春の一時期を過したのであるが、それは彼の人間、文学形成の基盤として種々の意味を内包する。この中、東京における魯迅については当時彼と生活起居を共にするなど密切な関係にあつた弟の周遐寿（作人）或いは親友の許寿裳、その他の客観的な記述を照応することによつて徐々にその姿が明らにされてきた。しかし、僅かに二年足らずではあるが仙台における魯迅については、彼の医学から文学への転進を決定的ならしめた関鍵であるにも拘らず、甚だしく孤立化しているために、今のところ殆ど彼自身の記述に依る外はなく、従つて未だ充全に明らかにされているとはいい難い。

最近、中国では魯迅関係書の出版が多く、また「魯迅全集」（註釋付）の編纂など大規模な経営を通じてわが国にもとくに日本留学時代の魯迅についての協力の要請がある。ここには勿論それに充全に応えうるものがあるわけではないが、「魯迅先生年譜」[1]（許寿裳編）を底本とし、その他の関係書、わけても戦後出版された各種を参照することによつて留日八年間における魯迅の経過を補遺のようなかたちにまとめ、併せてその精神形成の一断面をさぐつてみたいと思うのである。

註

(1) 「魯迅全集」（一九三八年復社版）の附録、以下「年譜」と略称。なお、これを底本にした竹内好編「年譜」（「魯迅」—世界評論社版—以下すべて同じ）をも併せ斟酌した。

(一) 東京、弘文学院へ

魯迅が南京の江南水師学堂及び江南陸師学堂附設の礦務学堂[1]における、およそ三年にわたる修学を終え、江南督練公所派遣[2]の留学生として初めて日本を訪れたのは一九〇二年（光緒二十八年、明治三十五年）三月（旧二月—以下すべて同じ）、二十二歳の時であつた。中国と風俗習慣の異なる日本へ旅立つに当つて、その準備に迷つた魯迅は日本遊歴の経験をもつある先輩を訪ねて教えを請うたところ、中国式の靴下を余分に用意すべきこと及び所持金はすべて日本の銀貨に換えるべきこと等を指示されてその通り実行したが、それは全く無用であつたといい、また、礦務学堂関係から

は魯迅を含めて五名が選抜許可されたが、中の一人は祖母が死なんばかりに泣いて止めたので断念したという（「瑣記」―「朝華夕拾」）。その四名は張邦華（協和）、伍崇学（習之）、顧琅（石臣）、及び魯迅であり、全留学生の引率者は江南陸師学堂総弁（総長）の兪恪士であった（周遐寿「旧日記裏的魯迅」―「魯迅小説裏的人物」）。

魯迅が修学した南京の学校が当時のいわゆる洋務運動派の唱える富国強兵策の一環として設立されたものであり、しかも江南督練公所という軍機関からの派遣であってみれば、彼の日本留学は表面的には少くとも富国強兵策の尖兵としての意味が甚だ強いわけである。[3]と同時に、亡父伯宜公が子供の中ひとりは日本へ留学させたいと語っていた（周遐寿「魯迅的故家」）ことと想い合わせれば、その日本留学は亡父のそのような見果てぬ夢の実現―おそらくは偶然の一致にすぎないであろうが―ともなるわけである。

さて、魯迅はこの年の三月二十四日（二、十五）、大貞丸に乗船して南京を発ち、四月四日（二、二六）横浜に到着、ついで三橋旅館（東京麹町区平河町四丁目）に旅装を解いた。はじめは成城学校へ入学する予定であったことは、周遐寿が四月十六日（三、九）に受け取った手紙の一節に『…不日進成城学校』（「旧日記裏的魯迅」）と記されていることで知られる。当時予備士官学校的な性格の成城学校への入学予定は、すでに前述した魯迅の日本留学の背景からすれば寧ろ当然とも考えられる。ところで、魯迅が実際に入学したのは成城学校ではなく、弘文学院であった。周遐寿はその間の事情について、礦務学堂は陸師学堂の附設であり、日本留学が陸師学堂の学生と一緒であったからであるが、成城は陸軍の学生のみ入学許可の規定があったため、留学生を二分し、礦務学堂関係者はすべて弘文学院に入学することになった（「同」）と説明している。これによっても魯迅の日本留学の予定された路線は略々推察されるのであるが、[5]もしここで魯迅が予定通り成城学校へ入学していたとすれば、あるいは彼の人生路線もおのずから変更をみる可能性も考えられぬことではなく、その微妙さが偲ばれるのである。

ともあれ、そのようなにがしかの経緯をへ、魯迅はこの年に設立された留日学生のための教育機関、弘文学院（はじめ宏文学院といい、牛込区西五軒町三十四番地）に入学した。[6]これは当時の東京高等師範学校長嘉納治五郎氏の主宰にかかるもので修業年限二年[7]日本語及び中学校程度（旧制）の一般課目を教えていた。魯迅の学歴からすれば一般課目はむしろ[8]なくもがなであり、従って彼はもっぱら日本語の修得に専念したものと思われる。許寿裳編の[9]「年譜」には『課余喜読哲学与文芸之書，尤注意人性及国民性問題。』とみえる。ここにみえる魯迅の当時の愛読書にふれて少しく述べてみると、まず清末民初の啓蒙家及び戊戌政変の立役者の一人として著名な梁啓超が亡命中の横浜で「新民叢報」[10]を発刊、ついで中国における文芸誌の嚆矢ともいうべき「新小説」[11]を創刊したが、とくにこの「新小説」創刊号の巻頭に発表された梁啓超の「論小説与羣治[12]之関係」は魯迅にかなりの影響を与えたようである。周作人（遐寿）はそれに関して次のように述べている。『「清議報」[13]与「新民叢報」的確都読過也很受影響，但是「新小説」的影響総是只有更大不会更小。梁任公的「論小説与羣治之関係」当初読了的確很有影響，』（「関於魯迅之二」）梁啓超（任公）のこの論文はその冒頭の『欲新一国之民，不可不先新一国之小説。』によっても察せられるように、政治革新の前提として『小説界革命』の必須なことを強調した、いわば一種の政治小説論ともいうべきものであり、それはまた恐らく彼が亡命中の当時の日本における政治小説との関連も考えられるのであるが、[14]それはともかく、この論文は魯迅文学の形成過程における一つの支柱として重要な作用を及ぼしたものと考えられる。それについては周作人がさらに筆をすすめて『雖然対於小説的性質与種類後来意見稍々改変，大低由科学或政治的小説漸転到更純粋的文芸作品上去了。不過這只是不看重文学之直接的教訓作用，本

意還沒有什麼変更，即仍主張以文学来感化社会，振興民族精神，用後来的熟語来說，可以說是属於為人生的芸術這一派的。』[15]（「同」）と述べているところからも察せられよう。

この外、許寿裳は弘文学院在学中の魯迅の書棚にあつた本として、バイロンの詩、ニーチェの伝記、ギリシャ、ローマの神話、屈原の離騒などを挙げている（「屈原和魯迅」―「亡友魯迅印象記」）。これらはおそらく彼が日本語修得のための便宜的なテキストという意味も兼ねていたと思われるが、しかし、そこにはやはり彼なりの選択の基準があるわけであり、わけても、バイロン[16]、ニーチェ[17]、屈原[18]など少くとも彼の初期の文学にそれぞれかなりの比重を占めていることが想い合わされる。

つぎに、「年譜」の人間性、国民性の問題については、やはり許寿裳がのちに折にふれて当時を追憶し拡充的に述べているが、いま主として「回憶魯迅」（「我所認識的魯迅」）を通して補足的に述べてみよう。ある一日、魯迅・許寿裳の談話はたまたま中国人の生命の無価値さ、特に異民族下の奴隷となつた場合のそれに想い及んで慄然とした。そのような中で二人の交友関係は急速に親密の度を加えていつたのであるが、その話柄はいつも中国民族の遅れ、欠陥を中心テーマに展開されがちであつた。そして、その議論は『怎様才是最理想的人性？』『中国国民性中最缺乏的是什麼？』『它的病根何在？』という三つの焦点に収約された。いろいろに論じあつたあげく、二人は中国の国民性に最も欠けたものとして『誠実』『愛情』の二つを打ち出した。つまり、裏からいえば、国民性に根深くしみついた詐偽・無恥・猜疑・中傷等々もろもろの欠陥を認めざるをえなかつたのである。ところで、それら病源の所在となれば、これはもちろん歴史的な探求を経なければならず、その由つて来るところ甚だ複雑多岐にわたるのであるが、就中最大の病源を異民族下に奴隷となつたことに求めた。しかし、翻つて思えば、奴隷となつた人間にして尚且誠実、愛情を云々する余裕があるであろうか。かくて、これを救う路は只一つ、革命以外にはない。二人はこのようなことを語りあい、思わず時の移ろいを忘れるのであつた。[19]許寿裳は当時の魯迅との談話の経過を以上のように述べたのち、その高邁な理想と遠大な着眼点に敬服して『他後来所以決心学医以及毅然棄医而学文学，都是由此出発的。』（「同」）と結んでいる。魯迅が医学修業のために仙台医専に入学したこと及び中途で医学を抛棄して文学に転進した経緯についてはいずれ後述するが、魯迅が生涯をかけた文学が中国民族の遅れ、欠陥を抉剔し、攻撃し、これを救済することを少くとも主な目的とする（たとえば阿Qはその集約的表現である）、その根由はすでにここにも胚胎するわけである。ともあれ、この国民性の問題というのは、おそらく異国日本に留学した魯迅が故国の現状を客観的に眺めた時にしみじみとその胸中を去来した思いであつたろうし、また、すでに民族革命の胎動が留日学生間にまで浸潤しつつあつたためでもあろう。当時の中国はまさに異族たる清（満洲）朝の積弊が重なつて、内外ともに多事多端、いわゆる『滅満興漢』の革命的機運が澎湃として昂まりつつあつた時であり、魯迅がその風潮を身近かに感得していたであろうことはいうまでもない。しかも、許寿裳の「浙江潮撰文」（「亡友魯迅印象記」）によれば、この年（一九〇二）の春、章太炎は東京に亡命して孫文と会見し、種々革命のことを劃策するとともに『中夏亡国二百四十二年記念会』を発起したことを伝えているが、なお、その時すでに東京にいた魯迅は当然この革命先輩に多大の影響を受けたであろうと推測している。魯迅は孫文を『永遠的革命家』（「中山先生逝世一周年」―「集外集拾遺」）とたたえ、章太炎には革命の導師として親しく教えを請うている（後述）ほどであつてみれば、この推測の当然であること云うまでもないが、魯迅が留学生として日本へ来た一九〇二年が魯迅と孫文の、あるいは少くとも章太炎との最初の出会いの記念すべき年であるとする可能性が甚だ強いわけである。いずれにせよ、彼の周辺にみなぎる革命的機運の中にその愛国的な至情が激し

くゆさぶられたであろうことは想像に難くない。事実、翌一九〇三年、彼が許寿裳に贈つた写真に題した詩の一句に『我以我血薦軒轅』とみえる。軒轅は漢民族の祖たる黄帝であり、従つて、これは彼の民族に対する献身の表明であり[20]、また、彼のそのような民族意識はもとより当時の清（満洲）朝打倒の民族革命の機運に促がされた目覚めに外なるまい。

ここで、当時の東京及び上海等を中心に渦巻いた革命的風潮について少しく触れておく。

一九〇一、二の二年間に中国の留日学生は急速に激増して数千を数えるに至つた。魯迅が留学した年にはすでに神田駿河台に留学生会館が設けられていたが、その開館式に際して呉祿貞はこれをアメリカ、フィラデルフィアの独立庁になぞらえる趣旨の演説を行い、三月には前述の『中夏亡国二百四十二年記念会』が上野精養軒で挙行されることになつた。これには章太炎が提案して宣言を起草し、留学生の参加を申出る者数百をかぞえるに至つたが、このことを予知した駐日公使蔡鈞は日本政府にその禁止を要請、当日警察の干渉があり、留学生は憤懣の裡に散会した[21]。なお、魯迅が『清光緒末，我初到日本東京時，這位呉稚暉先生已在和公使蔡鈞大戦了，……』（「古書与口語」―「華蓋集続篇」）と述べているのもこの頃のことであるが、公使蔡鈞の留学生に対する干渉が繰返されて紛糾がたえず、強制帰国を命ぜられる留学生も少くなかつた。このような排満運動を背景にして革命的な出版物も夥だしい数にのぼつたが、いま、一九〇三年、日本留学生を中心に東京で発刊された主なるものをあげると、「湖北学生界」[23]「漢声」[24]「江蘇」[25]「浙江潮」[26]「游学訳編」[27]等がある。

その頃、上海では蔡元培を会長に、章太炎らを発起人として中国教育会（最も初期の革命団体）が創立され、また南洋公学においては学生運動の嚆矢ともいうべき同盟休校が勃発し、これを契機として蔡・章及び呉稚暉を支持者として愛国学社が成立した（一九〇二）。この蔡元培・章太炎・呉稚暉らは同時にまた「光復会」（反清革命団体）の要人でもあり、「蘇報」[28]を利用して盛んに革命を鼓吹していた。当時、鄒容[29]は激烈な反清革命をテーマにした「革命軍」を発行したが、章太炎はその序を書き、また「蘇報」も新書紹介欄でこれを紹介するなど宣伝にこれつとめた。これがきつかけとなり「蘇報」を中心とする革命要人が逮捕されるという、いわゆる蘇報事件（当時の最も著名な文字獄）が勃発した（一九〇三）。尤も、蔡元培、呉稚暉は偶然に難を逃れ、章太炎のみが捕えられたのであるが、鄒容はのち自らすすんで捕えられた。かくて蔡元培は青島へ[31]、呉稚暉はロンドンへ亡命、章太炎は三年間租界牢獄につながれ、鄒容はついに獄死するという結末であつた[32]。愛国学社の解散、「蘇報」の発禁、蔡・呉の国外亡名等々の事態にも拘らず革命的出版物は前述の如く愈々多きを加えたが、それらの中魯迅に最も関係の深いものとして「浙江潮」があげられる。魯迅はこの「浙江潮」に、その編集員の一人でもあつた許寿裳にすすめられて「斯巴達之魂」（「スパルタの魂」七月第五期及び十一月第九期）を書き、ついで「說鉤」（「ラジウム論」十月第八期）及び「中国地質略論」[33]（第八期）等を発表した。

「斯巴達之魂」はギリシャが存亡の危機に直面した際の、ある烈婦の史談をテーマにした叙事詩的散文であるが、その執筆のモチーフはおそらく民族革命に対する彼の愛国心であろう。たとえば、許寿裳がこの作品は『便是借了異国士女的義勇，来喚起中華垂死的国魂。』（「我所認識的魯迅」―「同」）といい、さらに『借斯巴達的故事，来鼓励我們民族的尚武精神。』（「浙江潮撰文」―「亡友魯迅印象記」）と述べ、また、王瑤が『就是宣揚民族戦闘精神和充満了愛国主義的熱情的作品。』（「魯迅与中国文学」）と述べているのもそれである。また、それらの說の妥当であることは、魯迅自身がそのまえがきに『我今掇其逸事，貽我青年。嗚呼！世有不甘自下于巾幗之男子？必有擲筆而起矣。』と述べていることによつても察せられよう。当時の革命的機運の中に『斯巴達之尚武精神』（「集外集」序言）

を青年層に訴えようとする、若い魯迅の慷慨悲憤の気さえそこには感じられる。「說卻」はその頃新らしく発見されたラジウムの中国における最初の紹介であるが、ここではキューリー夫人のラジウム発見の経過の要約を述べると共に科学の本質にまで言及している。これに就いて、喬峯(周建人)は『可見他対于無生物学還有興趣。』(「魯迅先生和自然科学」——「略論関于魯迅的事情」)といい、許寿裳は『喚起純粋科学研究的重要。』(「浙江潮撰文」—「亡友魯迅印象記」)と述べているが、おそらく礦務学堂時代に科学の洗禮を受けた魯迅が中国に最も欠けたる科学こそ今後の中国を救う必須の武器であるとの自覚に促がされたものであろう。「中国地質略論」は中国地質論であると共に各省の鉱蔵にまで言及しているが、その背後に流れるものはやはり彼の愛国の情熱である。すなわち『吾広漠美麗最可愛之中国兮。而実世界之天府。文明之鼻祖也。』(第一「緒言」)と呼び、それがいたずらに外人の手に荒らされている現状を憂えて『中国者中国人之中国。可容外族之研究。不容外族之探険。可容外族之讃嘆。不容外族之覬覦者也。』(第二「外人的地質調査者」)と述べていることからもそれは察せられる。なお、この論文がかつての礦務学堂における修学と不可分に関連すること言うまでもあるまい。

以上の中、「斯巴達之魂」「說卻」はいま辛うじて「集外集」に収められているが、その収録の経過は略々次の如くである。つまり、はじめ魯迅が「墳」を編纂した時は故意にこの二つを除外したのであるが、後に揚霽雲が「集外集」を編むにあたり、丹念に抄写した原稿をみて驚嘆し、その処置に一任したというのである。従つて、魯迅としてもこの二つの作品は自信のある作品とはいえないわけであるが、彼はそれに触れて、これは恐らくどこからか偷んで来たもの(原作は日本文)であるが、原作者も記憶になく、また当時の日本語の理解程度からして内容にも疑問が多い、と述べ、更に文体についても、その頃流行した慷慨激昂的な美文調で、とくに「斯巴達之魂」はいかにも古めかしく、いま読んでみると思わず耳が熱くなる、と云い、更に、その文章には厳復の影響があり、たとえば「涅伏」は神経のラテン音訳であり、自分以外には通用しない[34]、等々のことを弁明している。[35]

ついでこの年(一九〇三)の秋、彼は「月界旅行」を訳了出版した。この原著者を米国培倫としたのは明らかに誤りで、実はフランスの科学冒険小説家ジュール・ベルヌ(Jules Verne)である。[36]これを手がけた動機ともいうべきものはその序言に依つてほぼ推察される。

『我国說部、若言情談故刺時誌怪者、架棟汗牛、而独于科学小說、乃如鱗角。智識荒隘、此実一端。故苟欲彌今日訳界之欠点、導中国人群以進行、必自科学小說始。』

この序は、かつて政治革新の前提として『小說界革命』の必須なことを唱えた梁啓超の『欲新一国之民、不可不先新一国之小說。』(「論小說与羣治之関係」)との類似が認められるが、魯迅としては恐らくその『小說界革命』の小說の分野に科学小說を第一義的に加えることによつて始めて政治革新の前提とマッチするという意識があつたのではなかろうか。この作品の執筆のかげにはやはり彼の科学救国の念願が介在したものと察せられる。[37]ともあれ、この「月界旅行」も前述の「斯巴達之魂」「銳卻」と同様に魯迅として自信のある作でなかつたことは、その後やはり揚霽雲にあてた手紙に『但我的訳本、似未完、而且幾乎是改作、[38]不足存的。』(「魯迅書簡」下、一九三四年七月十七日付)と述べていることで知られる。

以上、一九〇三年における魯迅の作品についてその概略を述べたが、それらを通してうかがわれるのはその背後に若い魯迅の気負い立つた愛国の至情と科学への抱負が脈々と流れていることである。その個々の作品をとらえてみれば「中国地質略論」以外はすべて日本語からの、せいぜい飜案程度のものにすぎず、それが含む諸々の欠陥については魯迅自身屢々言及しており、それは必ずしも彼の謙辞とばかりは受け取れず、

彼としては寧ろ捨て去りたかつたものであつたろうと思われる。しかし、その様な欠陥の所在にも拘らず、それを支える彼のひたむきな念願は、とくにそれが最も初期に属する作品であるだけに、以後の述作を導き出す基盤として看過しえないものがある。いま、それらの作品を支える彼の念願として、愛国と科学の二つをあげたが、これは二にして一である。つまり、魯迅における科学はまさに危機に瀕した祖国を救い、その発展のために必須であるという彼自身の自覚から選択したものであつて究極に於ては愛国に包含され、合流すべきものであるからである。[39]

魯迅のその様な科学への抱負がかつての南京における修学に基礎があることはすでに前述したが、その抱負を実際の述作に移したことについては、おそらく当時のいわゆる富国強兵策の虚しさを彼が身にしみて感得していたからではなかつたろうか。魯迅がかつて学んだ水師学堂及び陸師学堂附設礦務学堂はいずれもヨオロッパの科学技術の輸入の必要から富国強兵策の一環として各地に急設された学校の一つであり、その基礎、設備など貧弱を極めたものでしかないことを彼は知らされた。それについては、たとえば、

『爬上天空二十丈和鑽下地面二十丈，結果還是一無所能，……』（「瑣記」―「朝華夕拾」）

と記している如きその一例である。この『天空二十丈』は彼が水師学堂[40]でマストに登つたことを指し、『地下二十丈』は礦務学堂での坑道見学[41]を指すのであるが、その慘憺たる状況を彼は確認しているわけである。とにかく、魯迅は当時の富国強兵策が空喊に終りやすいことをみずからの体験を通して痛感していたのであり、彼のこれらの科学関係の述作にはそのような欠陥をみたし、うずめる意図があつたのではないかと推察されるのである。

さて、魯迅と科学との密切な関連は以上によつても窺い知られるのであるが、それはまた彼の生涯を通じて変るところがなかつたといつて差支えない。[42]尤も、彼は以下に述べるように仙台医専在学中に医学を抛棄して文学への路を選択し、以後その主力は専らその方向に集中されるのであるが、しかし、その路線といえども勿論科学との隔絶を意味するわけではない。いま、彼の文学作品の特質として殆ど通念的にあげられる『反封建』をとらえてみよう。これを内容的に観るならば、それは封建社会に内在し、民衆を不幸におとしいれる非科学的なるもの、たとえば、具体的には『漢法医』[43]或いは『人血饅頭』[44]といつたたぐいの偽瀆、からくりを抉剔し、その矛盾を衝くことを、少くとも主なモチイフにしている如きがそれである。これに就いて思い合わされるのは、後一九一七年に勃発したいわゆる文学革命にあたつて、その指導的役割を果した雑誌「新青年」の掲げた二大スローガンが民主と科学、徳莫克拉西(Democracy)と賽因斯(Science)であつたことである。[45]魯迅は「新青年」の編集に参加し、またその執筆者の一人であるなど協力的な立場をとつてはいたが、この文学革命という華々しい舞台に登場し、声を大にしてこれを標傍したわけではない。少くとも胡適、陳独秀のような立役者的演技をふるつたのではない。彼にはむしろそのような華やかな姿勢を本能的に避ける気質さえみえる。しかし、その文学革命の勝利は彼の「狂人日記」をまつて始めて実質的に裏づけられるという関係にあるわけである。ともかくも、彼が歩んだ路は実はこの二つを追い求める彷徨の路であつたことが偲ばれるのであるが、魯迅が啓蒙者、先駆者として絶えず時代の前面を歩いたということの意味、内容が、この科学という面においてもすでに萌芽的にではあるが傍証されるわけである。

（1）礦務学堂―礦路学堂又は路礦学堂など各書によつてまちまちに記入されており、魯迅自身も、礦路か路礦かはつきり覚えておらず、よるべき文献も手許にないので調べがつかない（「瑣記」―「朝華夕拾」）と述べている。但し、周遐寿（作人）は当時の日記を参照して礦務学堂が正当な名称のようである、と述べている（「旧日記裏的魯迅」―「魯迅小説裏的人物」）ので、ここでは一応それ

に従うことにする。なお、唐弢の「向魯迅学習」には、開礦を主とし鉄路（鉄道）を補とする学校で、礦路学堂としてある（詳しくは同書参照）。周遐寿以前に礦務学堂と明記したものは筆者のみる限りにおいては王森然の「周樹人先生評伝」（「近代二十家評伝」—民国二十三年初版、北京杏巌書店）があり、これには『十八歳進礦務学堂』とみえる。

(2) 江南督練公所—江南は各時代によつてその範囲が異るが、清代においては江蘇、安徽二省を指す。督練公所は清末に各省におかれた新軍隊を訓練する機関である。

(3) 魯迅の日本留学が江南督練公所という軍機関からの派遣であるということは従来軽視されてきた嫌いがあるが、この性格は以後の彼の行為をある意味で規制する役割りを持つたようであり、この点は看過さるべきでない。

(4) 周遐寿が受け取つたこの手紙の一節は「魯迅的故家」にも二月三十日東京からの来信として引用されている。

(5) 魯迅の日本留学が軍関係へのコオスを予定されていたことは認められるが、もちろん魯迅が軍人を志望したというのではあるまい。むしろ、南京の学校で洗礼をうけた「新学」への憧れが、最も便宜的な手段として、日本留学と結びついたと考えるべきであろう。

(6) この弘文学院入学に際して魯迅は制服を着て写真を撮り、それに次の如く題して周遐寿に送つている。題照贈仲弟　会稽山下之平民。日出国中之遊学。弘文学院之制服。鈴木真一之撮影。二十余齢之青年。四月中旬之吉日。走五千余里之郵筒。達星杓的仲第之英盼。兄樹人頓首。（唐弢編「魯迅全集補遺続編」）

(7) 竹内好氏は『最初は宏文学院という予備校にはいつた。その学校にずつといたかどうかわからないが（いたとすれば少し長すぎる）』（「魯迅」—世界評論社版）と疑つている。しかし、ここに二年間いたことは事実であり、周遐寿の説明によれば、弘文学院は二年で卒業と同時に中学（旧制）卒業の資格を認められ、その卒業証書を得て、高等専門学校入学の資格が与えられたので、どうしても二年間の在学が必要であつた（「旧日記裏的魯迅」）ということになる。従つてこれは後の仙台医専入学と資格上つながるわけである。なお、これについては後述するが、最近発見された魯迅自筆の学業履歴書（「日本と中国」日本中国友好協会、一九五六年一月一日付）によつても二年在学は明白である。

(8) 弘文学院時期の魯迅について許寿裳が『同修日語』（「懐亡友魯迅」—「我所認識的魯迅」）或いは『也正在予備日語』（「剪辮」—「亡友魯迅印象記」）と記していることからも推察される。

(9) 許寿裳が魯迅と識り合つたのはこの弘文学院入学当初であるが、詳しくいえば、許寿裳は杭州の求是書院を終え、魯迅より半年おくれて日本へ留学、弘文学院では許寿裳は浙江班、魯迅は江南班（各班それぞれ十数名）と班は別れていた（「剪辮」—「亡友魯迅印象記」）。

(10) 「新民叢報」—一九〇一年（光緒二十七年）冬、康有為・梁啓超ら立憲君主を主張する保皇派の機関誌として発刊された半月刊誌。発行人は馮紫珊、各冊約四十頁で論説・学説・時局・政治・雑評・小説・文苑等に分類、七十二冊まで出版した。なお、これは民主共和を主張する革命派の孫文らの「民報」と対立した。

(11) 「新小説」—一九〇二年十月、梁啓超が「新民叢報」の補助として創刊した月刊誌。発行所は横浜市山下町其社。時々休刊し、一九〇四年に停刊。なお「新民叢報」十四号（光緒二十八年七月）の予告に『中国唯一の文学報』と自称し『本報の宗旨は専ら小説家の言を借りて以て国民政治思想を発起し、その愛国精神を激励するにあり。』と述べている。内容は政治小説、社会小説、科学小説等と銘打つたものが多く、梁啓超の「新中国未来記」（一—三号）、我仏山人の「二十年目睹之怪現状」（八号—）などが載つた。魯迅がこの「新小説」と「浙江潮」（後述）の定期購読者であつたことは周遐寿の「旧日記裏的魯迅」によつて知られる。

(12) 羣治—これは一般にデモクラシーと訳されている（たとえば松枝茂夫訳「魯迅に関して」（周作人）及び竹内好著「魯迅」など）。しかし、この訳には問題がある。つまり、梁啓超がこれを直ちにデモクラシーの意味に使つたかについては大いに疑問が残る。梁啓超は立憲君主派の代表であつてデモクラットではない。羣衆を治める政治ではあつても羣衆が主体となる政治ではない。これはやはりひろく政治の意味と解すべきであろう。

(13) 「清議報」—一八九八年十月梁啓超が横浜で「時務報」に代つて創刊した旬刊誌。毎冊約四十頁、論説、名家著述、新書訳叢、文苑、外論彙訳、記事、羣報摭華などに分類。なお、わが柴東野史の「佳人の奇遇」、矢野竜渓の「経国美談」はこれに訳載された。

(14) 梁啓超のこのような小説と政治の関係論が必ずしも特異でなく、わが国にも似た例のあることは、たとえば『明治一六年、例の板垣退助の外遊にあたり、板垣はヴイクトル・ユーゴオをたずね、ユーゴオは政治思想振興のため、欧米の政治小説の翻訳を薦め、これが政治小説の流行に何ほどかの力があつた。』（瀬沼茂樹「北村透谷」—「日本歴史講座、近代篇、河出書房版）などが参照されよう。

(15) この『人生の為めの芸術』は後一九〇二年に結成された文学研究会の標語にも通ずる。なお、魯迅は文学研究会員であつたと誤解され易いが、彼はそれと密切不可分の関係にはあつたが、その所属会員ではない。

(16) バイロン（G. Byron）—魯迅はバイロンの詩に接した頃の感慨を次のよう

に述べている。『…就自己而論，也還記得怎樣読了他的詩而心神俱旺ら尤其是看見他那花布裹頭，去助希臘独立時候的肖像。…其実，那時 Byron 之所以比較的為中国人所知，還有別一原因，就是他的助希臘独立。時当清的末年，在一部分中国青年的心中，革命思潮正盛，凡有叫喊復讐和反抗的，便容易惹起感応。』（「雑憶」―「墳」）因みに、バイロンの翻訳紹介は恐らく馬君武が「哀希臘」を訳したのに始り、その後一九〇九年蘇曼殊は「拝輪詩選」を発刊、また梁啓超は「新中国未来記」の中で「哀希臘」と「The Giaour」（「異端外道」）を訳した。なお、魯迅は「摩羅詩力説」（一九〇七年）においてバイロンを紹介している。

(17) ニーチェ（Fr. Nietzsche）―魯迅は「文化偏至論」の中で十九世紀ヨオロッパ文明の偏向を糾正するものとして『物質万能の否定』と『個人の尊重』をあげ、その新思潮の代表をニーチェにおき、二十世紀文明は個人主義・主観主義の基礎の上に振興されることを説いている。なお、同書には「ツアラトウストラかく語りき」の一部を引用、のち一九二〇年にはその序言（「察拉図斯忒拉的序言」）を訳している。最近、馮雪峰はニーチェの超人哲学を反動ときめつけ、魯迅がその影響を完全に清算した過程を論じている。詳しくは「魯迅和俄羅斯文学的関係及魯迅創作的独立特色」（「論文集1」）参照。

(18) 屈原―許寿裳は、弘文学院期の魯迅が「離騒」を暗誦するまでに愛読していたことを拡充的に述べ、また郭沫若の「莊子与魯迅」にならつて魯迅の旧詩の詞句の「離騒」と一致するものを列挙している（「屈原和魯迅」）。なお、魯迅は「摩羅詩力説」に屈原をとり、更に小説集「彷徨」の題名及びその題辞に「離騒」からの句を引用している。

(19) 魯迅が民族革命への決意を固め、その一翼を担つたのは、後章太炎に師事し、光復会会員になつてからであるが、この頃すでにそれが萌芽的にみえている。

(20) 黄帝はまた中国における医学の祖とも伝えられる。魯迅の仙台医専入学はこの翌年、すなわち一九〇四年であるが、或いは彼の医学への念願も同時にここに秘められていたのかも知れない。

(21) 主として李剣農著「最近三十年中国政治史」に拠つた。

(22) これは呉稚暉が南洋公学のストライキで退学した学生を引率して日本へ渡り、成城学校入学について公使蔡鈞と衝突し強制帰国させられたことを指している。その経過は蔡尚思「蔡元培学術思想伝記」に詳しい。

(23) 「湖北学生界」―一九〇三年（光緒二十九年）東京で創刊された月刊誌。編集兼発行者は王璟芳、尹援一。執筆者には藍天蔚、劉成禺、李歩青、但寿らがあつた。第四期以後「漢声」と改めた。

(24) 「漢声」―前註参照。編集者は黄燕石。二冊で中止した。

(25) 「江蘇」―江蘇同郷会編集、月刊。第八期まで出した。

(26) 「浙江潮」―浙江同郷会編集、月刊。毎号六十余頁、社説、論説、学説、政法、経済、哲理、教育、軍事、歴史、伝記、大勢時評等の部門に分れる。第十二期まで出した。この雑誌はとくに魯迅との関係が深い（後述）。

(27) 「游学訳編」―湖南同郷会編集、月刊。これは学術紹介を主としたもので第十二期まで出した。（なお以上月刊誌の註は主として戈公振「中国報学史」に拠つた。）

(28) 「蘇報」―一八九七年（光緒二十三年）夏胡璋を経営者として創刊された革命鼓吹の新聞で、魯迅がこれを読んでいたことは、たとえば周遐寿の辛丑（一九〇一）十二月二十四日の日記に『夜同閲蘇報…』（「旧日記裏的魯迅」）とみえることによつても知られる。

(29) 鄒容―巴県の人。字は威丹。魯迅と同時の日本留学生であるが、彼について魯迅は「頭髪的故事」の中でふれている（後述）。

(30) その紹介の全文は戈公振著「中国報学史」第四章「民報勃興時期」に収録されている。

(31) 蔡元培の亡命先はベルリン、パリ、ヨオロッパなど各書によつて違うが、ここでは蔡尚思「蔡元培学術思想伝記」に拠つた。

(32) この蘇報事件の経過については同書に詳しいが、なお章太炎、鄒容の租界法廷における供述も併せて収録されている。

(33) 「中国地質略論」は「魯迅全集」には未収であるが、唐弢編「魯迅全集補遺続編」に収められている。なお、これには「浙江潮」に発表した号数が「説鈴」と重複するようになつているが、しばらくそれに拠つた。

(34) のち魯迅が化学の元素の翻訳には万国共通のラテン語を用うべし（「門外文談」―「且介亭雑文」）と主張したことと対照されよう。

(35) 詳しくは「集外集」序言参照。

(36) 魯迅は一九〇六年に「地底旅行」を訳し、その原著者を『英国威男』としたが、これも魯迅自身その誤りを認めているようにやはりベルヌである（「魯迅書簡」下、一九三四年七月十七日付楊霽雲に宛てた手紙。）

(37) 一九〇四年の三月頃、魯迅が当時南京の水師学堂に学んでいた周作人に送つた書籍の中にこの「月界旅行」があつた。この作者は「新小説」では焦爾士威奴としてあり、彼の「海底旅行」などが該誌に翻訳連載されて大いに好評だつたといういきさつがあり、魯迅がこれを翻訳したのもそれに影響されてのことであろう、と周遐寿は述べている。（「旧日記裏的魯迅」―「魯迅小説裏的人物」）。魯迅がこれを手がけた動機の中にはそのような実際的な事情もあつたものと思われる。

(38) 魯迅が拠つたのは井上勤氏の訳本で全二十八章あるが、魯迅はこれを十四回に截長して訳述した。

(39) この愛国が清朝打倒の民族的革命意識に強烈に裏打ちされたものであったか否かということになれば早急には断定し難い。前掲の詩句その他に依つて彼の民族への献身は充分に窺えるのであるが、当時はまだ醞醸的なかたちをとつていたとみるべきであろう。彼が民族革命への決意を固めるに至つたのは、後に章太炎に啓発されてからと見たい。

(40) この水師学堂に対する不満を魯迅はまた『烏煙瘴気』(「瑣記」)ということばで表わしているが、その内容の不備不完全さについては周遐寿の「学堂生活」(「魯迅小説裏的人物」)及び許景宋の「魯迅先生的学習精神」(「欣慰的記念」)が具象的に伝えている。

(41) 魯迅は一九〇一年九月二十五日に礦務学生として句容(江蘇省・青竜山(炭山))へ見学に行つた(「旧日記裏的魯迅」—「魯迅小説裏的人物」)。

(42) これに就いては喬峯の「魯迅先生和自然科学」(「略講関于魯迅的事情」)に略説されている。

(43) 『漢法医』—「吶喊」序及び「藤野先生」(「朝華夕拾」)にみえる。

(44) 『人血饅頭』—「薬」(「吶喊」)にみえる。

(45) 陳独秀「本誌罪案之答辯書」(「新青年」六巻一号)参照。

(二) 仙台医学専門学校へ

東京の弘文学院における二年間の修学を終えた魯迅は、医学を修めるために一九〇四年九月(八)に仙台へ行き医学専門学校に入学(無試験)した。最近東北大学本部書庫から彼の自筆の入学願書及び学業履歴書が発見されたが、これはたいへん貴重な資料となるので、その中の学業履歴書をここに再録する。

一 光緒二十四年九月ヨリ同二十七年九月迄本国南京官立江南陸師学堂入学普通科卒業(1)
一 明治三十五年四月ヨリ同三十七年四月マデ東京私立弘文学院入学速成普通科卒業
明治三十七年六月一日
清国留学生
周樹人(シュジン)(印)
二十二年

魯迅の医学への念願がすでに南京における修学の頃から伏在していたことを彼は次の如く述べている。

『生理学並不教，但我們卻看到些木版的全体新論和化学衛生論之類了。我還記得先前的医生的議論和方薬，和現在所知道的比較起来，便漸漸的悟得中医不過是一種有意的或無意的騙子，同時又很起了対于被騙的病人和他的家族的同情；而且従訳出的歴史上，又知道了日本維新是大半発端于西方医学的事実。』(「吶喊」序)

その頃すでにヨオロッパ近代思想及び科学の洗禮を受けていた(2)魯迅は、生理学関係書に接することに依つて中国の医術に対する不信を徐々に悟つたのであるが、漢法医がかたりに過ぎないということ及びかたられた病人とその家族への同情というのは、彼の父親の病気(一八九三)、その死(一八九六)に対する想い出が根深く、執拗に彼の脳裡にまつわりついていたことを物語つている。次に、日本の明治維新が大半は西方医学に発端する事実を知つたということについては恐らく変法維新派からの影響が考えられるであろう。魯迅はそれらを『這些幼稚的知識』(「同」)と多少弁解めいた口吻を洩らしてはいるが、後に自分の学籍を仙台においた理由として述べているのであり、この「吶喊」序だけに即してみれば彼は初めから医学を修める目的をもつて日本へ留学したというようにも受けとれる。(3)しかし、そこには弘文学院の時期が省略されているのであり、事実が必ずしもそうでないことは前述の経過からも明らかであるが、それを端的に表明したものとしては次の一節があげられよう。

『但待到在東京的予備学校畢業，我已経決意要学医了。原因之一是因為我確知道了新的医学対於日本的維新有很大的助力』(「自叙伝略」(4))ここでは明らかに弘文学院の卒業を待つて医学の修得を決意した旨が述べられている。従つて魯迅の医学への志願はすでに南京修学時代に伏在的なかたちで醞醸しており、それが弘文学院卒業を待つて始めて決意として

表明されたとみるべきである。おそらくこの医学へのコォスは彼としてもこの二年の予備期間に熟慮を重ねた上で採択したものであつたろう。さて、前引のそれぞれにみえる、明治維新と医学の結びつきは彼が医学を決意する重大な因素としてあるわけであるが、彼のいう『西方医学』『新的医学』は主にォランダ医学を指しているものであろうが、更にひろく蘭学に発端する西欧科学文明の導入とわが明治維新との関連を彼なりに意識していたのであろう。わが明治維新の本質的な窮明は別として、当時革新的な風潮の渦巻いていた中国にとつて、それが素晴らしい変革と映つたことは事実であり、魯迅もまたそれを驚異と受けとめた一人であつたろう。また、ここで看過しえないのは、範をわが明治維新にとつた康有為[5]、梁啓超らいわゆる変法維新派の影響である。魯迅がこの派の機関誌「清議報」「新民叢報」及び「論小説与羣治之関係」（梁啓超）等を読み大いに啓発されたことに就いてはすでに周遐寿の説（「関於魯迅之二」）を引用して述べたが、明治維新に対する彼の憧憬にはそれらの背景も考えられなければなるまい。要するに、彼が医学を採択する動機の中には、中国に維新をもたらすためという意味がこめられていたわけである。

さて、医学への志望を決した魯迅は『予備卒業回来，救治像我父親的病人的疾苦，戦争時候便去当軍医，[6]一面又促進了国人対于維新的信仰，』（「吶喊」序）という『美満的夢』（「同」）を抱きながら仙台へ向つて上野駅を旅立つたことになる。つまり、魯迅はいかにもロマンチックな夢に胸ふくらませて仙台へ出立したかにみえ、それはそれとして一応肯定しうるのであるが、しかし、後述の「藤野先生」或いは周遐寿の記述などからすれば彼の仙台行はむしろ俗悪な環境からの脱出又は逃避であつたかの感が深い。まず、ここで、魯迅が何故わざわざ仙台という、彼自身の表現によれば『郷間』（「吶喊」序）の医専を選択したかについての問題を探つてみる必要があろう。これに就いて魯迅自身の記述によれば次のようになる

『東京也無非是這様。上野的桜花爛熳的時節，望去確也像緋紅的軽雲，但花下也缺不了成羣結隊的「清国留学生」的速成班，頭頂上盤着大辮子，頂得学生帽的頂上高高聳起，形成一座富士山。也有解散辮子，盤得平的，除下帽来，油光可鑑，宛如小姑娘的髪髻一般，還要将頼子扯幾扯。実在標緻極了。中国留学生会館的門房裏有幾本書買，…。但到傍晩，有一間的地板便常不免要咚咚咚地響得震天，兼以滿房煙塵斗乱；問問精通時事的人，答道，「都是在学跳舞」。到別的地方去看看，如何呢？我就往仙台的医学専門学校去。』（「藤野先生」―「朝華夕拾」）

ここには、辮髪に学生帽をいただく清国留学生の異形さ、また跳舞への熱狂ぶり、それを嫌悪した魯迅がその雰囲気から脱出するために仙台へ、という経過が述べられているだけである。この魯迅の記述を更に具体的に補足するものとしては周遐寿の次のような説が参照される。即ち、まず医専入学については、大学の医学部は官立高等学校卒業生のみに許可され、中学卒業程度は（弘文学院はこれと同程度の資格が与えられた）専門学校に入学する以外になかつた（「仙台」―「魯迅小説裏的人物」）と、当時の学制上から説明している。つぎに、仙台については、東京近辺に千葉医専があり、普通ならわざわざ仙台まで行かなくともすんだわけであるが、魯迅が千葉医専を避けたのは『但是裏辺有些中国留学生，他覚得有戒心，便索性走得遠一点，到奥羽地方去吧』（「同」）と推測し、また『魯迅在東京看厭了清国留学生，便決計離開那裏，到日本東北方面的仙台，進医学専門学校去。』（「同」）とも述べている。この清国留学生に対する嫌悪は辮髪と跳舞に具象化して述べた前述の魯迅の「藤野先生」からの引用と対照されるのであるが、周遐寿はまた別に『魯迅平常看不起的留学生第一是頭上有「富士山」（辮子盤在頭上，帽頂凸出之雅号）的速成科，其次是岩倉鉄道明治法政的専門科，認定他們的目的是専在升官発財的』（「魯迅在東京」―「魯迅的故家」）と述べている。これらの記述を

通して知られることは、魯迅の仙台行が東京における清国留学生の一部に対する嫌悪、軽蔑、そしてその様な環境からの脱出という意味合いが甚だ強いことである。なお、ここで清国留学生の一部といったのは魯迅の嫌悪の対象になつたのは清国留学生一般ではないからである。それについては魯迅みずから、

『前清光緒末年，我在日本東京留学，親自看見的。那時的留学生中，很有一部分抱着革命的思想，而所謂革命者，其実是種族革命，要将土地従異族的手裏取得，帰還旧主人。』（「略談香港」―「而已集」）

と述べており魯迅もそれに共感する種族革命に熱心な留学生も決して少くはなかつたからである。つまり、当時の清国留学生にはいわゆる「滅満興漢」の種族革命に熱心であり、また実際にその一翼を担つていた人々と、留学を単なる升官発財の便宜的な手段とみなす人々と、あきらかに背反する二つのグループがあつたのであり、魯迅はその後者を嫌悪し、軽蔑したわけである。そして、その様な嫌悪を彼は跳舞、とくに辮髪という具象に託して吐き出しているのであるが、おそらく魯迅は日本に留学してみて、その周辺との対比から辮髪というものの異形さを強く感得せざるをえなかつたのであろう。しかも、その辮髪の上に学生帽をいただく奇態さ加減には――これを彼は『富士山』と嘲笑しているのであるが――つくづくやり切れなさを覚えたことであつたろう。事実、魯迅がそのような辮髪を日本留学後いくばくもなくして切り落したことは『我出去留学，便剪掉了辮子』（「頭髪的故事」―「吶喊」）と記していることで知られる。[7] ともかくも、この辮髪は当時の中国人にとつていわば清（満洲）朝への臣従の表象ともみられ、種々複雑な意味を内包するものであるが、これにまつわる幾つもの挿話を主題にした作品に「頭髪的故事」（「吶喊」）がある。いま、そこにみえる事件の一つを許寿裳の「剪辮」（「亡友魯迅印象記」）によつて補えば、およそ次のようになる。魯迅が辮髪を切り落すと他の留学生がひどく魯迅を嫌つたが、江南班の留学生監督姚某も魯迅に対して給費をとりやめ国へ送還すると叱責した。その数日後、数名の留学生が姚某の不倫の現場をおさえ、姚の辮髪を切り示衆のためにこれを留学生会館に吊した。姚はそのために逃亡のやむなきに至つた。その時の数名の留学生の一人に鄒容[8]がいたが、彼もそのために留学を続けることができなくなつて上海へ帰り、のち祖界の牢獄で獄死した。以上は当時の魯迅の周辺に起きた紛糾の一つであるが、辮髪にまつわるそのような悲喜劇がいよいよ彼の嫌悪をかきたて、強める素材となつたのであろう。ともあれ、この嫌悪すべき辮髪、その辮髪を垂らし升官発財のみをこととし、また跳舞に熱狂する清国留学生に魯迅が不快を感得したことは充分に察知される。魯迅が千葉医専を避けてわざわざ清国留学生のいない仙台行を思い立つた動機の中にはそれらの不快な雰囲気からの脱出あるいは逃避の心情がうごめいていたことも想像に難くない。

さて、魯迅はその仙台行にあたつて、前引のように『到別的地方去看看，如何呢？我就往仙台的医学専門学校去。』といかにも感情をおさえて述べているのであるが、しかし、これは俗悪な環境からの脱出を示す際に彼が好んで用いる表現法に外ならない。たとえば、かつて郷里紹興の人々に失望し、嫌悪をさえ感じた少年魯迅が南京遊学の途を択んで紹興を脱出する時に『好。那麼，走罷。』（「瑣記」―「朝華夕拾」）と記しているのと相互対応されよう。

以上、仙台行に際しての魯迅の心情を探つて来たのであるが、要するに、その頃魯迅はまだ渾沌[9]の裡にあつたようである。弘文学院在学中に許寿裳と論議しあつた国民性の問題、折にふれて綴つた詩、文章、翻訳あるいはこの場合の医学への志向など、すべて彼の民族に対する献身、愛国の至情に裏打されているに違いはないが、しかし、問題の核心を明確なかたちにおいて捉え、自己の方向を確信的に決定するまでには至つていなかつたように思われる。これは寧ろ当然のことかも知れない

が、ともかく、そのような心情の裡に彼は仙台へと旅立つたのではなかつたか。私にはそう思われてならない。先に引用した「吶喊」序にみえる『美満的夢』は彼の期待、抱負としてそのままに肯定しえても、なおそこに、遙るかなる『郷間』の都市仙台へ、只一人みずから孤独を求めて出立する若い魯迅の複雑な心影を余韻として汲みとるしぐさはいたずらな思い過しにしかすぎないであろうか。いまはそれを具象的に引証すべきものはなにもない。ただ、わずかに援用すべきものとして次のような一節があげられよう。

『従東京出発，不久便到一処駅站，写道：日暮里。不知怎地，我到現在還記得這名目。其次卻只記得水戸了，這是明的遺民朱舜水先生客死的地方。』（「藤野先生」―「朝華夕拾」）

後々まで忘れえない駅名として魯迅は水戸と日暮里をあげている。水戸はそこにも記されているように、最後まで反清的な姿態をくずさず、ついに異域に客死した明末の遺民朱舜水の終焉の地であり、しかも、朱舜水が同郷の先輩という関係であつてみれば、魯迅にとつて極めて印象的な地名であることは当然である。また、彼は仙台から東京への帰途、ここに途中下車してその墓前に詣でたこともあつた（許寿裳「民元前的魯迅先生序」―「我所認識的魯迅」）。しかし、日暮里という駅名がなぜ魯迅に忘れえぬ印象をとどめたのか。それは恐らくは、この名が中国の地名に類似しているからというだけのことに過ぎないのかも知れない。いま、ここで更に想像の余地が許されるとするならば、未知なる『郷間』の都市仙台へ旅立つて行く魯迅のその時の心情にあるいは「日暮途窮」（日暮れて途遠し）といつた、なにか索漠とした陰翳があり、それがたまたま日暮里という駅名とからみあつたのではなかつたろうか。しかし、これは所詮あまい想像にすぎず、要するに魯迅は問題の核心を模索しつつ渾沌たる心情の裡に、むしろ逃れるようにみずから孤独を求めて仙台へ旅立つたのであつたろう。彼は、やがて、この仙台医専在学中に自己の途を決定的ならしめる機に遭遇する。

(三)　二つの事件――医学から文学へ

かくて、仙台医専に入学した魯迅は唯一人の清国留学生として種々特別の配慮をうけた。彼は始め監獄近くの差入屋をかねた下宿（片平丁五十二番地佐藤喜東治氏方）[13]にいた。それは一九〇四年の秋ごろであつたが夥だしい蚊の襲撃になやまされた彼は蒲団をかぶり、顔を衣服でつつみ、僅かに鼻孔だけをのぞかせて呼吸するという方法をとつた。『在這呼吸不息的地方，蚊子竟無従挿嘴，居然唾安穏了。』（「藤野先生」―「朝華夕拾」）と述べてあるが、不慣れな環境の中で不便を忍びながら生活する姿が浮ぶ。そのような生活を送つている中に、翌一九〇五年、彼が二学年の時にその路を決定的ならしめる二つの事件があいついで起つた。その一は魯迅が試験前に予め問題を教示されたという嫌疑をうけた事件であり、かりにこれを試験問題漏洩事件と呼ぶ。その二は、映写された幻燈を観て彼が異常なショックを受けた事件で、これをかりに幻燈事件と呼ぶ。この二つの事件については「吶喊」序及び「藤野先生」にそれぞれ述べてあるが、その他これにふれたものを参照してその経過のあらましを述べる。

藤野先生[11]は解剖学担任の教授であつた。ある日、魯迅は研究室に呼ばれてノートの提出を求められた。二、三日して返されたノォトをみた魯迅は驚ろきと不安の交錯した感激を覚えた。彼のノォトは始めから終りまで朱筆で訂正が加えられていた。それは先生の担当課目が終るまで絶えず続けられた。解剖学実習[12]が始まつて間もない頃であつた。魯迅を呼んだ先生は『我因為聴説中国人是很敬重鬼的，所以很担心，怕你不肯解剖屍体。現在総算放心了，沒有這回事。』（「藤野先生」）と頗る上気嫌で語つた。なお、許寿裳はこの屍体解剖についての魯迅の言葉として、始めて執刀した時はさすがに異常な不安を覚えたが、特にそれが若い女子或は

嬰幼児である場合は忍びない感情にまけて勇気を奮い起さなければならず、また、母体における胎児がいかに巧妙にできているか、炭鉱労務者の肺肺がいかに黒く犯されているか、両親の性病が幼児にいかにみじめな害を及ぼすか等々をあげ、それら魯迅の言葉を総括して『総之，他的学医，是出於一種尊重生命和愛護生命的宏願，以便学成之後，能够博施於衆。』（「仙台」―「亡友魯迅印象記」）と述べている。魯迅が医学を修めたのは生命の尊重、愛護の悲願からであるという許寿裳の見解はこれを直ちに全的に首肯しえないとしても、そこに提言されている生命の尊重と愛護はいかにも重要である。これは単に魯迅の医学への志願だけに限らず、彼のあらゆる思想・行動の底を流れるヒューマニズムの精神として取り上げるべきであろう。彼の作品に死を扱ったものが多いことはすでに李長之（「魯迅批判」）その他によって指摘されているが、それは生命に対する愛惜の逆説的表現ともみられる。また、彼の愛する若い生命が失われるたびに彼がいかに痛惜して止まなかったか。たとえば「無花的薔薇之二」（「華蓋集続篇」）「記念劉和珍君」（「同」）「為了忘却的紀念」（「南腔北調集」）など、その慟哭の最も端的な現われとしてあげられよう。また、李長之が魯迅の根本思想としてあげる『人要生存』[13]（「魯迅批判」）も生命の愛惜につらなるものであろう。

さて、その年の学年試験がすんで後のある日、同級の学生会幹事が魯迅の下宿へノォトをみせてくれといってきた。その幹事が帰ったあとに部厚い手紙が配達されて来た。その文面は『汝悔い改めよ』[14]という一句で始まり、つづいて書かれた内容は要するに魯迅が学年試験に好成績[15]を収めたのは藤野先生がノォトに印をつけておいたからであるという意味のことであった。魯迅はすぐそれを先生に報告した。彼と親しい数名の同級生もその幹事を問責した。かくてその謡言は立ち消えになり、魯迅もその手紙を返してやり、それで一応落着をみた。事件はこれだけである。しかし、これが清国留学生魯迅に与えた衝撃は痛切なものがあったろう。それを彼は次のように記している。

『中国是弱国，所以中国人当然是低能児，分数在六十分以上，便不是自己的能力：也無怪他們疑惑。』（「藤野先生」）

感情をおさえてじっに淡々と、それは綴られている。しかし、それだけに魯迅がそこにしのばせた感慨のほどが汲みとれよう。

この事件に続いて、いわる幻燈事件が起った。第二学年では細菌学が加わり、それはすべて幻燈でみせることになっていたが、時間があまっているような時にはその幻燈で時事の画面を映して観せた。時たまたま日露戦争なので戦争関係のものが多かった。その画面の中に魯迅は久しく会わなかった同胞を見た。

『一個綁在中間，許多站在左右，一樣是強壮的体格，而頸出麻木的精神。拠解說，則綁的是替俄国做了軍事上的偵探，正要被日軍砍下頭顱来示衆，而囲着的便是来鑑賞這示衆的盛挙的人們』（「吶喊」序）

観ている学生の間から萬歳という歓呼の声が拍手とともに湧き上った。そのどよめきの中に、自分の同胞の殺されるのを黙って眺めている魯迅がいたわけである。

『但在那時那地，我的意見卻変化了。』（「藤野先生」）

魯迅の考えはどのように変ったのか。それを彼は次のように説明している。

『従那一回以後，我便覚得医学並非一件緊要事，凡是愚弱的国民，即使体格如何健全，如何茁壮，也只能做毫無意義的示衆的材料和看客，病死多少是不必以為不幸的。所以俄們第一要著，是在改変他們的精神，而善于改変精神的是，我那時以為当然要推文芸，于是想提倡文芸運動了。』（「吶喊」序）

魯迅が医学の修得を念願した原因及び仙台医専入学に際しての感懐などそれぞれすでに触れてきたが、いまや幻燈事件を一つの契機として彼

はその考えを一変したのである。つまり、現実の中国にとつて第一に必要なことは肉体よりはむしろ精神の改造、そのために精神の技手――文学者になることこそ最も緊要であるという自覚を彼は呼び醒まされたのである。しかし、それはやはり一応の説明であつて、その転機に際会した魯迅の胸憶にはどうしても言葉を以てしては説明し尽せない、更に複雑微妙なものがあつたものと推察される。ここでは、あくまでもその時の魯迅の心情に立ち入つての推測の範囲を出ないのであるが、まず考えられるのは、その幻燈の画面にあらわれた、スパイの嫌疑で打首にされる同胞もさることながら、それを取り囲んで無神経、無感動、無表情に傍観している一群れの同胞の姿に、魯迅は自己の影を見たのではなかつたか。当時の澎湃たる革命的風潮の渦中からただ一人、孤独を求め逃れるようにして仙台という『郷間』に来ている自分、それはいわば革命の傍観者にすぎぬのではないか。そのような想念が彼の脳裡を駆けめぐつたことも考えられよう。しかし、ともかくも、試験問題にからまる一部日本人学生の彼に対する軽蔑、それにつづく幻燈事件からの衝撃と重なつて、魯迅はついに学籍の抛棄を決意せざるを得なかつたのである。(16)

医学から文学へという路線は普通われわれが常識的に考えた場合は異質のものえの転換とも受け取られよう。魯迅のこの場合は、しかし、そのニュアンスがかなりに違うことを注意すべきである。魯迅が医学を捨てて文学へ走つたということを表面的な現われとしてみた場合は確かにそうであるが、しかし、更に本質的な、内在的な人世観或いは世界観の変貌をそれは意味しない。何故そういえるかといえば、彼の医学・文学はすべて国家の救済或いは国民性の改造という等一の念願に支えられたそれぞれの路線にすぎないからである。従つて、それは目的地に到達するための経路の変更ともみられる。前述の二つの事件はその変更を彼に自覚させ、それを促がし、早める契機としての作用を果したものと見られよう。『我們第一要著』と書いていることでそれは知られる。つまり、目的に到達するために医学よりももつと逼緊なものとして彼は文学をあげたのである。少くとも前述の「吶喊」序及び「藤野先生」の記述に即していえば、その様な説明が成り立つ。しかし、魯迅が幻燈の啓示によつて精神の改造こそ第一の着手と観じ、『善于改変精神的是，我那時以為当然要推文芸，于是想提倡文芸運動了。』と述べているこの措辞には魯迅のかなりの言い淀みがある。その時の複雑な感情をことばで表現しようという時の、或いは『我的文章…是擠出来的』(「阿Q正伝的成因」―「華蓋集続篇」)という意味での、一種の渋滞感が読みとれる。国民精神の改造ということは勿論その時魯迅が卒然と想い到つたことではない。すでに弘文学院の時期にこの問題を討論したことを許寿裳は「年譜」その他で伝えている。いま、それを、魯迅は仙台脱出の説明として文学というかたちで提出しているのである。ともあれ、魯迅――文学者という線は彼がやがて辿りつくべき、いわば帰宿ともいうべきものである。彼はその周辺を環境の曲折のままにまに彷徨しながらも歩一歩ひきよせられるように近ずいて行くのであり、仙台において彼はそれをはじめてやや明確なかたちでとらえたと見るべきであろう。

魯迅自身が述べたこの幻燈事件はそれ自身に含まれる多分に劇的な要素と相俟つてあまりにも有名であり、従つて魯迅を語る際に非常に屢々引用されがちである。それはそれで寧ろ当然でもあるが、ただその場合、ややもすれば魯迅のその時の複雑な心影が看過され、事件そのものの比重が著るしく拡大され易い嫌いがある。換言すれば、魯迅という人間の成長発展を基盤とする流動的な考察に欠け、固定的、完成的な既成観念をもつて律する危惧があるように思う。ここで試みに胡風の所論を引用してみよう。彼は魯迅の医学から文学への転換を述べるに当つて、まず、この幻燈事件をとりあげ、それを次のように説明している。

『這同時也是中国現代革命思想鬥争史上的一個巨大的事変。就魯迅本人説，他所接受的進化論的科学思想和批判的現実主義文学思想，第一

次形成了革命性的要求和行動；就中国的歴史要求上說，愛国主義終於露出了正確的方向：民族解放非得以人民解放為内容就不能够取得勝利，而人民解放的鬥争，是要以意識闘争打先鋒，是要以意識覚醒去打開缺口的。任何革命運動都有一個思想啓蒙運動在前面。』（「祖国愛・人民愛・人類解放」―「従源頭到洪流」）

胡風のこの解釋はいかにも明快である。しかし、明快であるだけにそれだけの不安も否定しえない。魯迅が生きかつ闘つた生涯のあとと照合すれば結果的には確かにこの説にも首肯しうるものがあるだろう。しかし、この幻燈事件をもつて直ちに中国現代革命闘争史の巨大な事変とする観法はいささか大袈裟に過ぎはしないか。また、この時の魯迅の転換を直ちに革命性の要求と行動の形成に結び付けるのは早急に過ぎはしないか。私はこの転換に際会して若い魯迅の胸中を去来した、おそらくはことばを以てしては説明し尽せない、さらに複雑な余情、余韻をこそ汲み取るべきだと思うのである。

さて、魯迅はかくして文学運動への決意をかためたのであるが、その文学はあくまでも精神、国民性の改造のためという一つの目的意識を内包するものであつたことは注目に値する。文学に対するその様な規定のしかたは広く中国における文学のありかた及び前引の梁啓超の「論小説与羣治之関係」等からの影響、更にこれまでに彼が手がけた述作の動機などからも窺えるのであるが、これを最も端的に表明したものとしては次の一節があげられよう。

『我也並沒有要将小説抬進「文苑」裏的意思，不過想利用他的力量，来改良社会。…説到「為什麼」做小説罷，我…以為必須是「為人生」』（「我怎麼做起小説来」―「南腔北調集」）

これは専ら小説について述べたのであるが、そのまま広く文学に代替してみても差支えない。社会を改良するための或いは「人生の為め」[17]の文学的な経営は実に魯迅文学を貫ぬく精髄であろう。勿論魯迅はその間あまりに苛酷無慘な現実に直面してその確信の動揺を感ずるのであるが、ともあれ、その様な彼の文学観がすでにその発足において萠芽的に意識されていたわけである。

なお、ここで一応考えておくべきことは、当時の中国における小説・文学の評価のありかたである。これに就いては前述の引用のすぐ前に『当我留心文学的時候，情形和現在很不同：在中国，小説不算文学，做小説的也不能称為文学家，所以並沒有人想在這一条道路上出世。』と述べていることからも察せられる。中国における文学は古くから詩、散文（文語体）のみに限られており、[18]当時の文学はたとえば古い伝統に支えられた桐城派のごときが少くとも正統的なそれであり、またそれのみが文学の名に値するものであつた。魯迅が意図し、実践した文学がそれらの古い伝統とは一応隔絶した、むしろヨオロッパ近代文学（主にスラブ系）の方向であることはいうまでもないが、その様な環境の中にあつて新らしい文学運動を志向した魯迅の決意は、いわば路なきところに路を拓り開く前駆的な難行が当然に予想されたことであろう。それは、まさに、

『什麼是路，就是従沒有路地方踐踏出来的，従只有荊棘的地方開闢出来的。』（「随感録」六十六―「墳」）

と述べている、その様な路に外なるまい。

(四) 『惜別』――結婚

さて、医学を抛棄して文学への路を決意した魯迅が愈々それを実行面に移す場合に最も躊躇されたのは、おそらく藤野先生に対してそれをどのように説明し、諒解していただくかであつたろう。藤野先生に対してその転移を明かすことは折角の、並々ならぬ好意をなみすることにもなり、魯迅も私情として忍びないものがあつたろう。魯迅は、しかし、一日先生を訪れてその決意を語つた。先生はさすがに悲哀の色を浮べ、ひ

たすらに嘆息するばかりであつた。仙台を去る二、三日前、先生の自宅に招かれた魯迅は一葉の写真を手渡された。『惜別』の二字がその裏に記されてあつた。喬峯はその写真に関して『当魯迅決定放棄医学，改学文学時，曾到藤野家裏去。藤野送他一張照片，並且写了「惜別」二字，下面具了自己的名字。……這張照片，魯迅把它一直掛在西三条一間房子裏写字枱上面壁上。』（「関于魯迅的断片回憶」―「略講関于魯迅的事情」）と述べている。魯迅が北京西三条の家の部屋にかけておいたというその写真はその後の彼にたえざる励ましを与える素材となつた。魯迅が「藤野先生」の全文を次のように結んでいることで、それは知られる。

『只有他的照相至今還掛在我北京寓居的東牆上，書桌対面。毎当夜間疲倦，正想偷懶時，仰面在燈光中瞥見他黒瘦的面貌，似乎正要說出抑揚頓挫的話来，便使我忽又良心発現，而且増加勇気了，于是点上一枝煙，再継続写些為「正人君子」之流所深悪痛疾的文字。』（「藤野先生」―「朝華夕拾」）

想えば、みずから孤独を求め、逃れるようにして仙台の地に学んでいた魯迅は藤野先生が示してくれた愛情――それは留学生に対する一片の好意にすぎなかつたかも知れぬが――を身にしみて有難く感得したのであつたろう。後、魯迅に親しく教えを受けた増田渉氏[19]が「魯迅選集」（岩波文庫版）を翻訳するに当つてどんな作品を択ぶべきかを原作者に問い合わせた時、作品の選択は訳者の適宜に任せる、ただ「藤野先生」だけは是非とも入れて欲しいと答えた魯迅の意向を伝え、これに就いて、魯迅は先生のその後の消息を知る手掛りにしたいと思つたのである（「魯迅の印象」）と述べている。また、その死の三ヵ月前、病床を訪れた――それは「魯迅選集」（岩波文庫版）出版一年後――増田氏に対して魯迅は『やつぱり先生の消息がないところを見ると先生はもう亡くなつたのかも知れない。』（「同」）と藤野先生に対する思いやりの程を洩らしている。その頃、藤野先生は故郷（福井県芳原町下番）[20]に隠退して診療所を開いていることが魯迅の死後に判明した。仙台医専で魯迅と同窓だつた小林茂雄氏が「大魯迅全集」（改造社版）附録の「月報」に発表した魯迅の学科成績はすでに前述したが、さらに、小林氏が藤野先生に対して魯迅について問い質した返信として次のように記されている。『私は少年の頃、酒井藩校を出て来た野坂という先生に漢文を教えてもらひましたので、支那の聖賢を尊敬すると同時に彼の国の人を大事にしなければならぬといふ気持がありました。（中略）周さんが泥坊であろうと学者であろうと将た又君子であろうと、そんなことに頓着なく、後にも先にも異邦人の留学生は周さん唯独りでした。それで下宿の周旋、邦語の話し方迄、及ばずながら便宜を計つてあげたことは事実です。』これは藤野先生のいかにも樸質な人柄のしのばれる言葉である。

とにかく、魯迅がその死の直前まで藤野先生の消息を気にかけていたことは前述の引用からも窺えるのであるが、彼はついにそれを知りえぬままに逝去したわけである。魯迅と藤野先生の交流はあらまし以上述べた通りである。それはいかにも心暖たまるニュアンスにみちている。しかし、問題はこれで終つたのではない。喬峯は次のような新らしい事実を伝えている。

『等到魯迅死後，有中国的訪問者跑去訪問藤野。這時候他已不当教授，個人在做医生了。対他講起往事，藤野彷彿已不大記得清楚了。但経于追憶起来了，說的確替魯迅改過筆記，認為這是很平常的事，覚得魯迅有的文章裏称他恩師頗以為怪。至于贈送照片一事，他却不承認：說可能是他的妻送給魯迅的。那時候藤野的年紀已経很老，可能的確記不清楚了。但也很可能，日本帝国主義者這時候正在積極準備武力侵略中国，中日戦争的空気已極緊張，不願意再提起贈送題「惜別」的照片的事情了。……総之，和魯迅所講的藤野当時的感情是很不一致的。』[21]（「関于魯迅的断片回憶」―「略講関于魯迅的事情」）

これに依れば、藤野先生は中国人の訪問者に対してノォトの訂正のこ

とは漸く認めたが写真の贈与は認めようとしなかつたわけであり、なにかためらいがちな藤野先生の言葉に対して、喬峯は、第一にその時藤野先生はひどく年老いて記憶が明確でなかつたのかも知れない、第二に日本帝国主義者が中国への武力侵略を積極的に準備中であり、中日戦争の空気が緊張の極にあつたので『惜別』の写真の贈与を改めて提起したくなかつたのかも知れない、という二つの可能性をあげている。この中第一については、前述の「月報」にみえる返信によつて判るように藤野先生の魯迅に関する記憶はかなりに明確であつたとみなければなるまい。しかし、個々の事実、たとえば写真の贈与など或いは藤野先生の記憶にうすれたことも考えられぬことではない。もし、そうではなくて、他に顧慮するところがあつた故意にそれらを否認したとすれば——恐らくそうであつたろうが——それはやはり喬峯のあげる第二の可能性によることが、当時の緊迫した情勢及び魯迅評価の一般的なありかた等よりして必ずしも不自然でなく受けとれるであろう。ともあれ、藤野先生の魯迅に対する好意は前述の返信にもみえるように、先生自身にとつては『異邦人の留学生』に対する当然のことであつたろう。それが後にあのようなかたちではね返つて来るとは夢想だもしなかつたにちがいない。いわば代償を求めぬ純粋な愛情の発露だつたのであろう。そのような好意、愛情がいかに尊いものであるかを我々はいまさらに知らされるように思う。もしそうであるとすれば、魯迅が語る当時の藤野先生の感情とはたいへんに不一致である、といくばくの不満をこめた喬峯の結びも溶解の余地があるのではなかろうか。

魯迅が仙台医専を退学したのは第二学年の中途からである。許寿裳の「年譜」にはこの年（一九〇六）『六月回家，与山陰朱女士結婚。同月，復赴日本，在東京研究文芸，中止学医。』とみえる。この順序は、退学の時期をはさんでやや明確さを欠いている。魯迅の退学届は湖北江南西留学生監督宝巽の名で山形校長宛に提出され明治三九年三月十五日付で受理されていることが判明した。[22] 許寿裳はなお別に魯迅が退学して上京したのは『第二学年春假的時候』（「懐亡友魯迅」—「我所認識的魯迅」）としているが、とにかく、彼は帰国以前に退学の手続をすましているのであり、前記の年譜はそのように補訂さるべきである。

さて、この年の七月（六）、魯迅は一時帰国して結婚し、すぐまた東京に舞い戻つているのであるが、この結婚については彼自身これに言及することを故意に避けているようであり、またその間の事情を解明した文献も極めて乏しいのであるが、まず欧陽凡海の説をあげよう。『有的同郷甚至伝消息到他家郷裏説他已経和日本女人結婚，帯着児子在神田散歩了。這種謡言使他家裏非常驚訝，便接二連三来催他帰国，有時一日甚至有両封信来催，予才竟憤怒麻煩得神経裏弱起来。[23] 但結果他在這一年的陰暦六月帰国了。……他到家就由親戚和家族逼迫他和山陰的朱女士結婚了。家人以為他現在是一個新人物，当心他不拝祖宗，或者反対旧式婚儀，然而他却並沒有，家属要他怎麼做，他就怎麼做了。只是結婚一禮拝之後，他馬上就再離開故郷，到東京了。』（「魯迅在日本」—「文芸陣地」四巻十二期）

ここには魯迅の帰国、結婚、再び東京への経過がかなり具象的に述べられている。その他、これに類するものとして、林辰の「魯迅的婚姻生活」（「魯迅事蹟攷」）があるが、これはおそらくは欧陽凡海の記述に拠り、部分的に訂正を施したものである。ともあれ、これまで不明であつた魯迅の結婚の経緯を解明したものは現在までのところ以上の二つのみであり、従つてしばらくこれに従う外はあるまい。とすれば、仙台医専を退学し東京に戻つた魯迅についての謡言（日本婦人と結婚し子供までもうけたという）が故郷へ伝えられ、狼狽した故郷から再三にわたる督促の便りがあり、かくて彼はやむなく帰国し、親戚家族が予め備えた設定のままに朱女士と結婚した、ということになる。[24] 魯迅はこの結婚後三日にして再び東京へ戻るのであるが、その後およそ十四年間（一九〇六—一

九）彼は単身で東京、杭州、南京、北京等を転々、妻とは完全な別居生活をとつた。一九一九年北京に家を購い、母及び妻など家族を迎えたが、この時も魯迅と朱女士は別の部屋に住み、話を交わすことすら稀であつたらしい。そこには夫婦としての愛情のかけらさえみられず、おそらくは肉体関係も終始なかつたのではないかと推察される。そのような、魯迅の生涯を通じてある種の暗い翳を生む因素ともなつた、名のみの妻朱女士との結婚を魯迅は意外に無抵抗に受け入れているのであるが、それは一体何故であろうか。これに就いては林辰が『但他為了不願払逆母親的意思，免她傷心……』（「魯迅的婚姻生活」）と述べているように、母親の意志に逆らい、傷心させたくなかつたから、という以外に適宜な説明を下すことは難しい。もともとこの結婚は、同族の謙少奶奶（魯迅の母の親友）が姑の藍太太の内姪孫女（即ち朱安）を魯迅の妻として媒酌した（周遐寿「阿長的結局」―「魯迅的故家」）のであつて、魯迅としても到底これを抗みえなかつたものと思われる。逆にいえば、『父母之命媒酌之言』（「論睜了眼看」―「墳」）が周家の長男たる魯迅に対して殆んど絶対的な強制力を持つていたものと推察される。[25] 魯迅はのちに許寿裳に対して『這是一件母親送給我的禮物，我只好好地供養它。』[26]（許寿裳「西三条胡同住屋」―「亡友魯迅印象記」）と述懐したということからもその間の消息は窺えよう。いずれにもせよ、周家の長男たる魯迅がこの場合古い慣習から母親の意向に逆らうこともならず、黙々としてそれに順応したとみる外はない。この時の魯迅のありかたを林辰は『只好犠牲自己』（「同」）といい、竹内好氏は『だから彼の結婚も自己犠牲のあらわれとみていいわけだが』（「魯迅」）と述べている。しかし、自己犠牲とは己れをなみすることによつて他を救い、生かすことにその完成的な意義が認められよう。この結婚によつて救われたとみえるのは恐らく母親の魯老太太或は媒酌人の藍太太等極めて少数にすぎず、それとても最後的な救いにはならない。魯迅と朱女士は相互に傷つきながらも目にみえぬ古い慣習の圧力によつて他律的に結びつけられたのである。いかなる説明によろうとも、これが魯迅にとつて終生つぐないえない過失となり、彼につきまとう暗い翳の一つとなつたことは否みえない。のち一九一八年、魯迅はある未知の青年から「愛情」と題する新詩を受けとつた。それは父母その他の命令、媒酌によつて一片の愛情もなく恰も二匹の獣のように結びつけられた結婚を哀しむ内容のものであつた。その措辞はいかにも稚拙ではあつたが、魯迅は『卻対于我有意義。』（「随感録」四十―「熱風」）とし、しかも『這是血的蒸気，醒過来的人的真声音。』（「同」）と認めた。かくて、魯迅はこれを「随感録」にまとめて当時の「新青年」（六巻一号）に発表した。魯迅はその中で『無愛情的結婚的悪結果』を説き、またその反面『在女性一方面，本来也沒有罪，現在是做了旧習慣的犠牲。……又不能責備異性，也只好陪着做一世犠牲，完結了四千年的旧賬。』と述べているが、その語句の中から朱女士との『愛情のない結婚』に魯迅がいかに苦しんだかが察せられ、同時に旧式の結婚[27]と朱女士に対する魯迅の感慨を窺うことができる。彼は朱女士に対しては愛情こそ持ちえなかつたが、自分をも含めて旧いものの犠牲者として眺めていたように思われる。[28] なお、彼は『愛情是什麼東西？我也不知道。』（「随感録」四十）と述べている。彼がひろい意味での愛情に比較的に恵まれることの少かつたことはその成長期を振返つても略々察せられるであろうが、いわば異性乃至は夫婦間の愛情といつたものを彼が摑みえたのはおそらく一九二三年、彼が許広平女士と識り合つて以後のことであろう。もちろん、これとても、教師と学生という変則的な愛のかたちを払拭し去ることはついにできないのであるが。

さて、朱女士との結婚式をすませた魯迅はその三日後に弟の周作人を（遐寿）伴つて再び東京へ戻つた。かくて彼はまず伏見舘（本郷湯島二丁目）に居を定め（周遐寿「魯迅在東京」―「魯迅的故家」）、文学運動の劃策に乗り出した。しかし、魯迅をめぐる当時の環境はその期待を順調に満してく

れはしなかつた。東京を中心とする留日学生のありかたは前にも触れたが、そこには富国強兵策の流れをくむ一種の実用主義が支配的であつた。これに就いては魯迅自身も、

『在東京的留学生很有学法政理化以至警察工業的，但沒有人治文学和美術。』（「吶喊」序）

と述べているが、そのような中でいわば非実用的な文学をやつて行くことがいかに周囲と逆行し、従つて冷淡視されたかが想像されよう。なお、この年（一九〇六）翻訳出版したものにベルヌの「地底旅行」[29]がある。これは前述の「月界旅行」等一れんの訳業に続くものであるが、やはり自信のある作でないことは、彼が楊霽雲に宛てた返信に『地底旅行，也為我所訳，雖説訳，其実乃是改作，筆名是索子，或索士，但也許沒有完。』（「魯迅書簡」下、一九三四・六・五）とみえることによつて察せられる。その他「中国礦産志」[30]の出版があるが、これは前の「中国地質略論」の延長であり、同時に各省における礦蔵の所在を詳細に分類列挙したものである。なお、未詳の「北極探険記」[31]の訳了もこの前後であろう。

(五)「新生」の企劃と失敗

ついで、一九〇七年の六月（五）、東京の留日学生間にセンセーショナルな報道が伝わつた。それは徐錫麟が安徽巡撫恩銘を刺殺し、その場で逮捕されたというニュースであり、ついで、秋瑾女士[33]が郷里の紹興で捕殺されたという消息が伝わつた。かくて、直ちに殉難烈士追悼の会合がもたれた。席上、満清政府罵倒の声があがり、即刻北京政府に打電してその無道を痛斥すべしとする一派と、その必要なしとする一派に分れて会議は紛糾した。魯迅はあくまでも打電を主張してゆずらなかつた（「范愛農」―「朝華夕拾」）。

このような騒然たる事件をはさんで、魯迅が文学運動の第一着手として文芸雑誌の発刊を具象化したのはその年の夏であつた。まず数名の同志を探がし[34]、種々協議の上で誌名も『新的生命』（「吶喊」序）の意味をこめた「新生」と決まつた。当時の模様をその参劃者の一人である周作人は次のように述べている。

『那時留学生辦的雜誌並不少，但是沒有一種是講文学的，所以発心要想創辦，名字定為新生，――這是否是借用但丁的，有点記不清楚了，但多少総有関係。其時留学界的空気是偏重実用，什九学法政，其次是理工，対於文学都很軽視，新生的消息伝出去時，大家頗以為奇，有人開玩笑説這不会是学堂所取的進学「新生」麼？又有人（彷彿記得是胡仁源）対予才説，你弄文学做甚，有什麼用処？答云，学文科的人知道学理工也有用処，這便是好処。客乃默然。』（「関於魯迅之二」）

当時の留日学生間に支配的だつた実学偏重については屢々触れたが、そのような中で文芸雑誌の発刊を試みることが、ややもすれば一種の茶番劇とさえ受けとられがちであつたことが察せられる。ともあれ、魯迅はその中で最も精力的に活躍したが、その準備も着々進行したことに就いては、やはり参劃者の一人である許寿裳が『……可是書面的図案以及挿図等等，記得是統統預備好了，一事不拘的……連它的西文訳名，也不肯隨俗用現代外国語，而必須用拉丁文曰 Vita Nuova。』（「魯迅的思想与生活」）[35]と述べていることからも察せられる。しかし、その出版の時期が近ずいた頃、まず若干の執筆者が姿を消し、ついで資金担当者が逃亡し、あとに残つたのは『不名一銭的三個人』（「吶喊」序）だけであつた。この三人は魯迅、周作人及び許寿裳である。やがて、この三名もめいめいの運命に駆り立てられ、共に集つて将来の甘美な夢を語り合うことすらできなくなり、かくして、「新生」は、ついに、『未産生』（「同」）に終つてしまつたのである。

魯迅が胸ふくらませた文学への期待、夢はその第一歩において空しく破れ去つたのである。彼の失望と悲歎のほどが思い知られる。その頃の

感慨を彼は次のように述べている。

『我感到未嘗経験的無聊，是自此以後的事。我当初是不知其所以然，後来想，凡有一人的主張，得了賛和，是促其前進的，得了反対，是促其奮闘的，独有叫喊的生人中，而生人並無反応，既非賛同，也無反対，如置身毫無辺際的荒原，無可措手的了，這是怎様的悲哀呵，我于是以我所感到者為寂寞。』（「吶喊」序）

魯迅が提起した文学への志向に対して賛成するのでもなく、また反対するのでもない、いわば全く無関心な、まるで反応のない状態、そこから感じ取った悲哀を彼は寂寞と名ずけているのである。ともあれ、魯迅はその文学運動の気負い立った第一歩、「新生」の発刊に失敗したわけであるが、しかし、勿論それは彼の文学的意欲の中断を意味するのではない。おそらくその多くは「新生」のために準備したと思われる諸種の作品を、雑誌「河南」[36]という場をかりて発表している（魯迅、「墳」題記による）からである。それらの作品にはドイツ、ヘッケル（Haeckel）氏に拠つて生物学的進化論の発達を要約した「人的歴史」、ギリシア、ローマ以来の科学発達を略説し併せて人類社会の進歩に不可欠なものとしての精神面を強調した「科学史教篇」及び十九世紀文明の偏向たる物質万能主義、凡俗主義とその反動として起つた個人主義、意志主義などヨォロッパ近代精神の系譜を紹介した「文化偏至論」、バイロン（G. Byron）からペテーフィ（Petőfi Sandor）[37]にいたる『反抗』と『行動』の詩人、しかも一般俗世間には容れられなかつた革命的詩人を紹介した「魔羅（サタン）詩力説」がある。これらの作品の背後にはそれぞれあきらかに科学への信頼と個我の解放が一貫して流れているが、中でも「文化偏至論」と「魔羅詩力説」は恰も表裏一体をなすものとして特記されなければなるまい。前者において彼は、いまなお物質主義に執着して富国強兵を唱え、商工業及び立憲国会を叫ぶ一般改良派を批判し、人間の確立、個人の尊重、精神の作興こそ必須の根抵であることを強調し、後者においては、その具象的あわれとして、神に抗い自由をかちとるサタン（魔羅）派の詩人、すなわち『反抗』と『行動』の詩人を顕称している。更にいうならば、この「魔羅詩力説」は魯迅が試みた最初の文芸論であり、そこにはバイロンからイプセン（H. Ibsen）、シェレー（P.B. Shelly）、プーシキン（A. Pushkin）、レールモントフ（M. Lermontov）、ミツキエヴィチ（A. Mickiewicz）、ペテーフィ等その他が紹介されているが、彼の説くところによれば、これらの人々はその品性、言行、思惟など種族のちがいによつて、そのあらわれは異るが、実は一つに統一される。つまり『無不剛健不撓，抱誠守真，不敢媚于羣，以随順旧俗，発為雄声，以起其国人之新生，而大其国干天下。』（「魔羅詩力説」）というのである。現在の中国にとつてその様な詩人こそ待望さるべきであるが、果して現状はどうであろうか。彼はこの仮説に対して『今索諸中国，為精神界之戦士者安在？有作至誠之声，致吾人於善美剛健者乎？有作温煦之音，援吾人出于荒寒者乎？』（「同」）と述べている。要するに、バイロン等悪魔派の詩人及びあらゆる『反抗』と『行動』の革命的詩人を紹介、称揚して中国にそのような『精神界之戦士』を待望するというのが全篇の趣旨と読みとれる。これは、彼の文学論の原型として、とくに、次の「域外小説集」以下に続く彼の外国文学の翻訳、紹介、摂取の雛型として種々の問題を含んでいる。即ちここに採り上げた詩人の中には少くとも世俗的には著名でなく、むしろ聞き慣れぬ詩人さえ決して少くはない。それらを魯迅が択んだのは、恐らく自己に最も密切な関連をそこにみ、自己に最も有意義であると認めたからに外なるまい。それらの詩人達がそれぞれの国家の悲運に際会し、或いは不遇、愚昧なる環境を打開するために、いかに反抗し、叫喊し、行動したか、そのあとをしるし、紹介することが自己及び現実の中国にとつて切実であると認めたからであろう。簡言すれば、魯迅の外国文学に対する態度は決して他律的ではなく、すこぶる自律的である。この傾向は彼のその後の訳業に顕著であり、従つ

てまた広く中国文学の外国文学摂取に大きく影響していることも特筆に値しよう。

なお、この年（一九〇七）の秋、魯迅は亡命白系露人コンテ夫人(Maria Konde)についてロシャ語を習つた。その発起人は陶望潮、他に魯迅、周作人、許寿裳、陳子英、汪公権[38]の六人であつた。その頃、魯迅は伏見館から中越館（本郷東竹町）へ移転していたが、毎晩神田駿河台のコンテ夫人宅まで徒歩で通つたわけである（周遐寿「魯迅在東京」—「魯迅的故家」）。当時の魯迅の生活を周遐寿は『最是自由無拘束』（「同」）と述べているが、このロシャ語学習以外彼はもつぱら文学の営みに専心したのであろう。

(六) 章炳麟（太炎）との出会い——光復会

ついで、翌一九〇八年、許寿裳の「年譜」には『是年従章太炎先生炳麟学，為「光復会」会員，並与二弟作人訳域外小説。』とみえる。章太炎が蘇報事件に連坐して牢獄につながれた事は前述したが、彼は一九〇六年七月（六）に出獄するや直ちに日本に亡命し「民報」の編集に当つていた。魯迅は以前から「蘇報」「民報」等を通じて民族革命家たる太炎に私淑していた。この年「民報」はたまたま発禁になり[39]、以後、太炎は神田大成中学の教室で国学講習会を開催し留学生の啓発にあたつた。その頃、太炎の承諾をえて、民報社（牛込区新小川町二丁目八番地）の一室に於て「說文解字」の講義が行われることになり、魯迅もこれに参加した[40]。魯迅が章太炎と師弟の関係を結んだのはこの講義が機縁となつたわけである。この国学講習会といい或は「說文解字」の講義といい、いわば古い学問であつて、当時のいわゆる新学、又は革命風潮といかに結びつくかが問題になると思うが、ここで一応当時の革命風潮の背面を流れる復古的傾向について触れておく。つまり、当時の滅満興漢の革命運動は満人支配の政府を打倒して漢人支配の中国を再興するということから、清以前の明（漢人支配の朝代）への思慕が強く、この点に革命と復古との連繋があつたわけである。これについては、たとえば魯迅も『因為我們那時大低帯些復古的傾向』（「吶喊」序）と述べており、また『前清光緒末年，我在日本東京留学，親自看見的。那時的留学生中，很有一部分抱着革命的思想，而所謂革命者，其実是種族革命，要将土地従異族的手裏取得，帰還旧主人。除実行之外，有些人是辦報，有些人是鈔旧書。所鈔的大低是中国所沒有的禁書，所講的大概是明末清初的情形，可以使青年猛省的。』（「略談香港」—「而已集」）と述べているが、当時の革命風潮と復古的傾向との関連が理解されよう。さらに、当時の留学生が好んで明末清初における、満人による漢人虐殺の記録（清代禁書）を鈔写、出版したことについては『別有一部分人，則専意搜集明末遺民的著作，満人残暴的記録，讀在東京或其他的図書館裏，抄写出来，印了，輸入中国，希望使忘却的旧恨復活，助革命成功。于是揚州十日記，嘉定屠城記略，朱舜水集，張蒼水集都翻印了，』（「雜憶」—「灯下漫筆」—「墳」）が参照されよう。

さて、樸学大師としての章太炎は清朝のいわゆる訓詁考証学の域を超え、当時としては頗る斬新、特異な思辨、論証法につらぬかれており、たとえば、許寿裳をして『在清代三百年学術史中沒有第二個人』（「章炳麟伝」緒言—「亡友魯迅印象記」に拠つて引く）と絶讃せしめる程の卓越した学者である。魯迅の太炎に対する感銘は、しかし、そのような学者としての面もさることながら、それよりは寧ろ、熱烈な民族革命の鼓吹者、実践者としての彼の人間にあつたのである。それについては、

『我的知道中国有太炎先生，並非因為他的経学和小学，是為了他駁斥康有為和作鄒容的革命軍序，竟被監禁於上海的西牢。……一九〇六年出獄，即日東渡，到了東京，不久就主持民報。我愛看這民報，但並非為了先生的文筆古奥，索解為難，或說仏法，談「俱分進化」，是為了他和主張保皇的梁啓超闘争，和「××」的×××闘争[41]，和「以紅樓夢為成仏之

要道」的×××闘争，真是所向披靡，令人神往。前去聴講也在這時候，但又並非因為他是学者，卻為了他是有学問的革命家。』（「関於太炎先生二三事」―「且介亭雑文末編」）

と述べているところからも明らかであろう。魯迅の章太炎に対する傾倒はこれをその反面からみれば『保皇を主張する梁啓超』一派との断絶を意味することも看過さるべきではない。梁啓超の魯迅への影響についてはすでに前述したが，この頃魯迅はすでにいわゆる変法維新派が内包する革命の限界性を明確に認識し，これに不満を持つに至ったものと察せられる。これをさらに具体的にいえば，かの戊戌政変の立役者たる康有為，梁啓超らの変法維新派は，これを『中学為体，西学為用』[42]を基本原理として専ら富国強兵策に拠る曾国藩，李鴻章，張之洞らのいわゆる洋務運動派と比較すれば，変法（その集約的表現は立憲君主制）を主張する点に幾分の進歩性は認めうるが，しかしいずれにしても保皇，つまり清朝絶対制を温存し，その機構の上に改革を提唱したのであって，しよせん改良主義の範囲を出ない。魯迅がこの様な改良主義にあきたらず，民族革命への志向に促がされていたのはすでに日本留学当初からであった。それは前述のように彼が許寿裳と国民性の問題を語り，異民族の奴隷となった際の悲惨を自覚していたこと及びその後彼が遭遇したいくつかの事件或は彼の述作等を通してもそれは窺えるのであるが，いまや熱烈な民族革命家章太炎に親炙することによってその自覚はついに確信にまで深められ，強められたものと察せられる。ここに前掲の「年譜」にみえる光復会会員の問題が連関してくる。

魯迅が当時の革命的秘密結社の一つである光復会[43]の会員であったか否かについては現在までのところ決定的な定論はなく，魯迅自身も少くとも記述の上ではこれに触れていない。従って肯定否定の二論が並行して来たのであるが，先ずその否定論の最大の根拠ともいうべきは弟の周作人が『但他始終不曾加入同盟会，……他也沒有入光復会。…以浙東人的関係，予才似乎応該是光復会中人了。然而又不然。這是什麼縁故呢？我不知道。』（「関於魯迅之二」）とかなり明確に否定していることである。一方肯定論の根拠は前掲の許寿裳の「年譜」であり，その間の論議を最も些細に斟料したものとしては林辰の「魯迅曾入光復会之考証」（「魯迅事蹟攷」）があげられる。いま肯定論をA，否定論をBとし，林辰のあげている例をまとめてみると，A説に属するものは，「年譜」（許寿裳），「論魯迅的思想」（平心），「魯迅的書」（欧陽凡海），「従有一分熱発一分光生長起来的」（胡風）。B説に属するものは，「関於魯迅之二」（周作人），「民元前的魯迅先生」（王冶秋）等である。林辰はその結論としてA説の妥当性を認めているのであるが，彼はまず当時の魯迅をめぐる激しい革命風潮，それに対応する魯迅の精神の所在をその詩，著作（「摩羅詩力説」）から探ぐり，更に仙台における医学から文学への転進の契機，また章太炎への傾倒等々の諸事実から推してその可能性を強調し，さらに，当時の魯迅の主なる交友[44]がすべて光復会会員であった事実を国民党中宣部編の夫々の伝記及び許寿裳に問い質した往復書簡等を通して確かめ，ついで魯迅の帰国後の諸事実を調べあげて益々その確信を深めており，更に慎重に「年譜」の編者許寿裳にその根拠を訊ねて次の如き返信を得ている。『光復会会員問題，因当時有会籍可憑，同志之間，無話不談，確知其為会員，根拠惟此而已。至於作人之否認此事，由我看来，或許是出於不知道，因為入会的人，対於家人父子本不相告知的。』（「魯迅曾入光復会之考証」）。かくして林辰は『魯迅之為光復会会員，是毫無疑問的了。』（「同」）と断論しているのであるが，この精密慎重な考証に対して反論すべき余地は殆んどないように思われる。なお，ここに挙げられた許寿裳の説以外に林辰の考証には魯迅が胡風に対して『我加入的是光復会，不過這件事沒有人知道，』（「従有一分熱発一分光生長起来的」）と語った事実が引用されており，重要な傍証となるがその他これに類するものをあげれば魯迅が馮雪峯に対して『光復会非失敗不可，它可以説連能够称得上政綱的政綱都

沒有！……我可是就属于光復会的。』（「回憶魯迅」）と語つた言葉など、やはり重要な傍証の一つに加えられるであろう。

ここで魯迅の身辺雑記的なことを附記すれば、この年（一九〇八）四月、彼は許寿裳にさそわれて中越館から伍舎（本郷西片町ろノ七号、夏目漱石の旧宅）に移転した。この伍舎は五人同居（魯迅、周作人、許寿裳、銭均甫、朱謀宣であろう）にちなんで命名したのであろう。この頃「支那経済全書」（同文会編）の中国語訳が出版されることになり、魯迅はその原稿整理の一部を分担した。これは伍舎の負担金に追われ、それを補充するためであつたらしい。[45] なお、この時の印刷所が神田印刷所であり、後述する「域外小説集」（周作人と共訳）をここで印刷することにしたのもその関係からであるという。[46] なお、この年彼は独逸協会学校に聴講生として在籍していた。[47]

(七)「域外小説集」――日本文学との関連

ついで一九〇九年、まず第一に特記すべきことは「域外小説集」二冊の出版である。魯迅の文学的経営をみると、その翻訳の量が全集の略々半数を占めており、啓蒙的文学者としての魯迅がこの面にいかに熱意と関心を示したかが察せられるのであるが、「域外小説集」はその最初の試みであるだけに彼の外国文学に対する原型として種々の意味を内包する。その第一部の「序言」に彼は次の如く記している。

『域外小説集為書，詞致樸訥，不足方近世名人訳本。特収録至審慎，迻訳亦期弗失文情。異域文術新宗，自此始入華土。使有士卓特，不為常俗所囿，必将犁然有当于心，按邦国時期，籀読其心声，以相度神思之所在。則此雖大濤之微漚歟，而性解思惟，実寓于此。中国訳界，亦由是無遅暮之感矣。』[48]

後一九二〇年、再版本（上海群益書社）に附した「新序」[49]には次の如く記されている。

『我們在日本留学時候，有一種茫漠希望：以為文芸是可以転移性情，改造社会的。因為這意見，便自然而然的想到介紹外国新文学這一件事，……於是又自然而然的只能小資本経営，[49] 姑且嘗試，這結果便是訳印域外小説集。当初的計劃，是籌辦了連印両冊資本，待到売回本銭，再印第三第四……。如此継続下去，積少成多，也可以約略介紹了各国名家的著作了。於是準備清楚，在一九〇九年約二月，印出第一冊，到六月間，又印出了第二冊。寄售的地方，是上海和東京。[50] 半年過去了，先在就近的東京寄售処結了帳。計第一冊売去了二十一本，第二冊是二十本，以後可再也沒有人買了。那第一冊何以多売一本呢？就因為有一位極熱的友人，[51] 怕寄售処不遵定価，額外需索，所以親去試験一回，果然劃一不二，就放了心，第二本不再試験了。……至於上海，是至今還沒有詳細知道。聴説也不過売出了二十冊上下，以後再沒有人買了。於是第三冊只好停板，已成的書便都堆在上海寄售処堆貨的屋裏了。過了四五年，這寄售処不幸被了火，我們的書和紙板，都連同化成灰燼，我們這過去的夢幻似的無用的労力，在中国也就完全消滅了。』

この翻訳を出版するについての抱負及びその経過、結末などがこの序言、新序を通してかなり詳細に知られるが、魯迅が訳したのはアンドレエフ（L.Andreev）の「笑い」（「謾」）、「沈黙」（「默」）とガルシン（V. Garshin）の「四日」の三篇で、ドイツ語から重訳した。訳文は古文調のものであるが、その翻訳態度については、彼が増田渉氏にあてた私信に『……その時支那（註原文ノママ）では林琴南氏の古文訳の外国小説が流行で文章は成程うまいが誤訳が大変多いから私共はこの点について不満を感じ矯正したいと思つてやり出したのです。』（「魯迅の印象」）とみえる。これに依れば、当時流行した林琴南訳の外国小説の誤訳に不満を持ち、それを矯正しようというのが、この翻訳の動機の一つであつたことが知られる。従つてその訳文は厳正さをもつて称されるのであるが、この点については許寿裳も『我曾将徳本訳本対照読過，覚得字字忠実，

絲毫不苟，無任意增刪之弊，実為訳界開闢一個新時代的紀念碑，使我非常興奮。』（「雜談翻訳」―「亡友魯迅印象記」）と賞讃している。なお、この訳文の中には現在ではすでに理解し難い古字を好んで用いてあるが、それは、魯迅が当時章太炎について小学（文字学）の講義を受けており、その影響によるものと思われる。[52] ともあれ、この飜訳は林紓の外国小説の誤訳及び恐らくはその選択の杜撰さに反撥的に刺戟されたところに発足するわけであるが、その様な厳正な態度にも拘らず、この書の出版はその反響の面からみれば明らかに失敗であつたといわなければならない。林紓訳本の成功に比してこれが失敗に終つた原因はなにか。胡適はこれを次の如く述べている。『十幾年前，周作人同他的哥哥也曾用古文来訳小說。他們的古文工夫既是很高的，又都能直接了解西文，故他們訳的域外小說集，比林訳的小說確是高的多。……但周氏兄弟辛辛苦苦的這部書十年之中，只銷了二十一冊。[53] 這一件故事応該使我們覚悟了。用古文訳小說，固然也可以做到「信，達，雅」三個字，如周氏兄弟的小說，但所得究不償所失，究竟免不了最後的失敗。』（「五十年来之中国文学」―「胡適文存」二集二巻）。胡適のこの論は「域外小說集」が最後的に失敗した理由を専ら訳文の古文体に帰している。しかし、それだけでは林紓の訳本と対比した説明としてあきらかに不充分である。これについて阿英は重印本「域外小說集序」に『初出的時候，見過的人，往往搖頭說，「以為他才開頭，卻已完了！」那時短篇小說還很少，読書人看慣了一二百回的章回体，所以短篇便等於無物。』とあるのを引用してこれを第一の主なる理由にあげ、第二の理由としてこの飜訳は当時の中国の読者には不慣れな原書の章節格式をそのままに踏襲し、また林紓の意訳の『一気呵成』な文章ではなく『詰屈聱牙』であつて、これが歓迎されなかつたのは必然である（「晩清小說史」）とみている。この阿英の見解は当時の実状と照応したものであるだけに聴くべきものをもつている。[54] なお、共訳者たる周作人はここに収めた作品を各国作家別に分類し、その割りふりからして㈠スラブ系の偏重㈡被圧迫民族の偏重という二点を特性として挙げているが、これは卓見といえよう。尤も最初はひろく世界の作品を順次飜訳紹介して「域外」という表題に符合させる意図であつたことは前引の「新序」或は第一冊の「略例」を参照することによつて明瞭であるが、それにしても既出の二部を通して、周作人のあげた特性はそのまま魯迅の外国文学摂取の特性として首肯されよう。

魯迅自身はこれに関連して、

『因為所求的作品是叫喊和反抗，勢必至於傾向于東欧，因此所看的俄国波蘭以及巴爾幹諸小国作家的東西就特別多。也曾熱心的搜求印度埃及的作品，但是得不到。記得当時最愛看的作者，是俄国的果戈理（N. Gogol）和波蘭的顕克微支（H. Sienkiewitz）。』（「我怎麼做起小說来」―「南腔北調集」）

と述べており、最も愛読した作家としてゴーゴリ、シエンキヴィツチをあげている。ともかくも魯迅はスラブ系及び東欧、バルカン諸小国等のいわゆる弱小、被圧迫民族の文学にとくに強い関心を示したわけであるが、これを裏返せばラテン系の作品には熱意を示さなかつたということであり、それは植民主義的国家群の文学には関心がうすいということにもなるが、逆に弱小、被圧迫民族の文学に対する彼の共感は、つまり、自国と同じ環境にある国の文学者がその抑圧された悪条件の中でいかに『叫喊』し或いは『反抗』したか、又しつつあるかを紹介し、訴えようという切実な意図が扱みとられる。これは同時にかつての「魔羅詩力說」からの延長であるが、国民性改造のための文学、国民精神の技師或いは社会、人生の為めの文学という、彼の文学的発足に際して予定された路線に、それは沿つているわけである。

さて、これらスラブ系及び東欧、バルカン諸小国の文学作品を彼が読み、吸収したのは主としてドイツ語、レクラム文庫を通してであつた。魯迅がレクラム文庫を愛読したのは、彼の習熟した外国語がドイツ語で

あつたからであろうが[55]——コンテ夫人に習つたロシヤ語は途中で中止した[56]——その他、この文庫の価格が留学生としての彼にとつて恰好であつたためであり、またこの文庫には一般には求めにくい弱小民族の文学作品が数多く含まれていたからでもあつた。なお、魯迅はこのレクラム文庫及びその他の書籍を東京各処の書店に往来して購入した[57]。

次に、ここで当然魯迅と日本文学との関連が考えられよう。魯迅が日本に滞在したのは一九〇二年からこの年（一九〇九）の八月（六）までのあしかけ八年間であり、仙台医専における彼の文学的出発、東京における最初の文学運動等から推して、日本文学の魯迅への影響が予想されてよいわけであるが、実際には、それは意外なほどに稀薄なようである。周遐寿は魯迅と日本文学の関係を次の如く述べている。

『但是他対於日本文学不感什麼興趣，只佩服一個夏目漱石，把他的小説「我是猫」「漾虚集」「鶉籠」「永日小品」，以至乾燥的文学論都買了来，又為読他的新作「虞美人草」定閲「朝日新聞」，随後単行本出版時又去買了一冊，此外只有専訳俄国小説的長谷川二葉亭，講南欧文学的上田敏博士，聴説他們要発表創作了，也在新聞上毎天読那両種小説，即是「平凡」与「渦巻」，実在乃是対人不対事，所以那単行本就不再買了。他為甚麼喜歓夏目，這問題且不談，総之他是喜歓，後来翻訳幾個日本文人的小説，我覚得也是那篇「克萊格先生」訳得最好。』（「画譜」—「魯迅的故家」）

これによれば魯迅が感銘したのは僅かに夏目漱石だけであり、その他、二葉亭、上田敏などを読んだということになる。但し『他対於日本文学不感什麼興趣』というのは些さか極論であり、のちに数名の日本作家の小説を飜訳出版している（「現代日本小説集」[58]周作人と共訳）ことからしても、魯迅は少くとも現代日本文学を相当に注目していたとみなければなるまい。また、魯迅自身も『記得当時最愛看的作者……日本的，是夏目漱石和森鷗外。』（「我怎様起做小説来」—「南腔北調集」）と述べているように最も愛読した作者としてゴオゴリ、シエンキヴィッチと並んで漱石、鷗外の名をあげている。しかし、それが魯迅文学の形成に与えた影響となれば勿論前者に比すべくもなく稀薄であるという外はあるまい。なお、漱石をとくに愛読したことは前述の引用から明らかであるが、漱石の魯迅に及ぼした影響として周作人が『予才後日所作小説与漱石作風不似，但其嘲諷中軽妙的筆致実頗受漱石的影響……。』（「関於魯迅之二」）と指摘している点は一考を要しよう。これは恐らく、集約的にみれば漱石の「我輩は猫である」にみられる嘲諷軽妙な筆致と「阿Q正伝」の筆調との類似を暗示した発言であろうと受けとれる[59]。その他、当時はいわゆる自然主義文学が喧伝された頃であるが、これについてもやはり周作人が『至於島崎藤村等的作品則始終未曾過問，自然主義盛行時亦只取田山花袋的棉被，佐藤紅緑的鴨一読，似不甚感興味。』（「同」）と述べているように、日本自然主義文学の魯迅への影響といいうる程のものは殆んど認められない。それはまた前記の「現代日本小説集」にその類の作品を全然採用していないことからも明らかであろう。そのような魯迅と日本文学との関連の稀薄さは、要するに、その当時魯迅がひたすらに追求し、共感した作品が『叫喊』と『反抗』のそれであつたという、彼の著るしく自律的な選択からの帰結であるともみられるわけであり、そして、その基本的な態度はその後においても変るところがなかつたといいうるのである。

むすび

以上、留日八年間における魯迅のありかたをおおよそ年代順に辿つて来たのであるが、いまその歩みのあとを内容的に振返つてみれば、多少便宜的な嫌いはあるが、やはり仙台脱出を境界に前後二期に考えられるであろう。その前期は、いわゆる富国強兵策の尖兵として日本に留学して以後の弘文学院及び仙台医専在学期を含むのであるが、その期間はか

つての南京礦務学堂在学中に接受した科学の洗禮が依然として明確に尾をひいており、それが当時の革新的風潮にともなう愛国的な熱情に裏打ちされた科学救国ともいうべきかたちにおいて、その頃のいくつもの述作に表明されている。更にはまたそれが彼に仙台行を択ばしめる内在的な因由の一つともなつたものと察せられる。この仙台における医学の抛棄、文学への転進は彼が混沌（カオス）の中からともかくも文学者として踏み切つた第一歩としてまさに劃期的な契機であり、その発足に際しての国民性改造のための文学というのは、やがて文学は実人生に有用でなければならぬとする彼の文学観確立への基底をなすこと、言うまでもない。ついで後期は、彼が採択した文学の路を開拓してゆく最初の工作過程である。周作人はこの頃の魯迅をとらえて『在東京的這幾年是魯迅翻訳及写作小說之修養時期』（「関於魯迅之二」）と述べている。総括的にいえば確かに飜訳及び小說創作の修養時期という以外にないわけである。しかし、これを具象的にみれば、まず文学運動の第一著手としての「新生」の挫折、その痛切な失望を超えて発表した諸種の作品中にはやはり科学への信頼が流れているが、たとえば「文化偏至論」に強調されている人間の確立、個我の解放、精神の作興等は十九世紀ヨオロツパ近代思想を濾過した上で確められた信念として特筆されなければなるまい。それにつづく「魔羅詩力說」における『反抗』と『行動』の詩人の称揚はまさにその具象的なあらわれをバイロンからペテーフイに至るサタン（サタン）派に見出したもので、彼の文芸論の最初の開花として注目に値する。次の訳業「域外小說集」はこの「魔羅詩力說」に不離につらなる作品であり、そこに表明されたスラブ系及び被圧迫民族の偏重という特質には、彼の外国文学摂取の基本的態度があきらかに打ち出されているとともに、わけても被圧迫民族文学への共感は、おそらく十九世紀東欧を中心に起つたナショナリズムに対する彼の切実な関心からであろう。それはまた、彼が章太炎という導師をえて、かつていくばくかの影響をうけた改良主義的維新派を超え、民族主義革命への確信を深めて行く背景とも関連するであろう。飜がえつて想えば、魯迅の留日八年は、清末という革命期のさなか東京という根拠地に身をおいた彼が押し寄せる世界史の波の変転の中にいろいろな可能性を試みていつたプロセスであり、いまこれをとりまとめ、一言以て表すとするならば、わかわかしい情熱にみちた愛国的ロマンチシズムの時代といいうるであろう。

註

（1）ここには魯迅が最初入学した江南水師学堂及び実際に在籍した江南陸師学堂付設礦務学堂の名が省略されている。

（2）その影響の最も大きかつたものとして厳復訳「天演論」（Thomas Huxley "Evolution and Ethics"）を通しての進化論の吸収などが特筆される。魯迅がこの書を感激して読んだことは「瑣記」（「朝華夕拾」）に詳しい。

（3）たとえば陳秋帆（北京師大助教授）が『そこで、礦路学堂を卒業して日本留学に派遣されるときには、すでに医学を学ぶ決心をしていた。』（「魯迅―中華民族の文化新軍の旗手」―「人民中国」一九五六、一〇所載）と述べている如きがそれである。

（4）「自叙伝略」―一九二五年に「阿Q正伝」のロシヤ語訳（訳者は王希礼 B. A. Vassiliev）のために書いた、全文僅かに七百字程度のものである。いま「集外集」所収。

（5）康有為は一八九七年光緒帝に謁見し、日本明治維新の政を以て政法とし、ロシヤペートル大帝の心を以て心法とすべきことを説き、その著「日本変政考」「俄彼得変政考」を奏上した。なお、彼等少壮革新派の運動はいわゆる「百日政府」と呼ばれるように、ついに失敗に帰したが、日本の明治維新、立憲君主制がその規範の一つであつた。

（6）軍医―戦争になつたら軍医になろう、という魯迅のこの決意は一般には当時勃発した日露戦争という背景からのみ理解されているようであるが、これもやはり前述したように彼が軍機関からの派遣留学生であるという身分的制約を加味して考えられなければなるまい。

（7）魯迅の断髪に就いて周遐寿は、一九〇三年三月に魯迅が謝西園に托して家へ送り届けた荷物の中に魯迅の『断髪照想』があつたことを述べ（「補遺」―「魯迅的故家」）、従つてその期日はおよそ一九〇三年二月であろう（「剪髪」―「魯迅小說裏的人物」）と推測している。その写真の題辞は前章註（6）参照。また、許寿裳も、魯迅が江南班の中で最初に辮髪を切つたこと、その日、晴々

しい表情で自修室へ来た魯迅に対して『阿！壁塁一新！』というと、魯迅は手で頭をなでながら、お互いに笑い合つた想い出を記している（「剪辮」―「亡友魯迅印象記」）。

(8) 鄒容については前章註(29)参照。

(9) これについて許寿裳は「魯迅先生年譜」一九〇二年の条に『……尤注意於人性及国民性問題。』と記している外に「回憶魯迅」（「我所認識的魯迅」）等においてこれを拡充的に述べている。

(10) 「仙台時代の魯迅」（山田野理夫「文学」第二十四巻第十号岩波書店）及び「魯迅選集」（岩波書店版）附録「編集室より1」による。なお、この家は現存し現在は西垣久美氏宅であるという。

(11) 藤野先生―名は厳九郎、明治七年福井県坂井郡本蔵村に生る。愛知医学校卒、同校教諭から第二高等学校へ転じ、三十四年仙台医専講師、三十七年教授となる。明治四十五年三月仙台医専が東北帝国大学の附属となつた際、資格の関係で退職、大正八年福井三国町で開業、昭和二十年死去されたという。（山田野理夫「仙台時代の魯迅」（「文学」二十四巻十号による）

(12) 解剖学習―仙台医専には附属病院がなく、宮城病院（東三番丁元貞坂）を実習に使用した。解剖実習に用いた屍体はこの病院に収容された無料施療人、行路病死者、宮城刑務所囚人の病死者、死刑囚人等であつたという（「同」）。

(13) これについては、おそらく李長之は魯迅の『倘若有人一定要問我，青年応向怎樣的目標，那麼……就是一要生存，二要温飽，三要発展。』（「北京通信」―「華蓋集」）から暗示をえたものと思われる。なお、この三条は「忽然想到」（「華蓋集」）にもみえる。

(14) これは「新約」にみえる言葉で、時たまたま日露戦争にあたり、トルストイがロシヤ皇帝及び日本天皇にあてた書簡に引用した冒頭の一句でもあるという。

(15) これについては、たまたま魯迅の同級生故小林茂雄氏の筐底から出た『解剖五九・三、生理六三・三、独逸語六〇、化学六〇、組織七二・七、倫理八二物理六〇、平均六五・五、一四二番中六八番』という成績が発表されている。（増田渉「魯迅の印象」参照）。

(16) 喬峯（周建人）は『不久，日俄戦争爆発了，有的日本人看出魯迅是中国人時，便譏笑地説：「為什麼不回去血，還在這裏読書做什麼？」有一次竟在路上衝突起来。』（「関于魯迅的断片回憶」―「略講関于魯迅的事情」）という消息を伝えている。これが一九〇四年であることは明白であるが、弘文学院の時か或は仙台医専入学後かは明記してない。しかし、いずれにしても日露戦争と留日学生魯迅との微妙な関係を示唆する挿話である。もしこれが仙台医専入学後であるとすれば（文脈からはそうとれるのだが）、或は彼の仙台脱出を早める素材の一つとも数えられよう。

(17) これについては前章註(15)参照。

(18) これについては拙稿「中国小説に関するノオト」（「北大文学部紀要」2）参照。

(19) 昭和六年三月から十二月末まで殆んど毎日三時間を増田氏への講述にさいたという（「魯迅の印象」）魯迅の好意は、藤野先生対魯迅の関係と表裏をなすものように思はれる。

(20) 「魯迅選集」（岩波書店版）附録「編集室より1」による。

(21) 喬峯はこれを当時上海で出版された「中流」に拠つて書いたのであるが、この雑誌は未見である。

(22) 「魯迅選集」（岩波書店版）附録「編集室より1」による。

(23) 魯迅が親戚家族に結婚を迫られて神経衰弱になつたという欧陽凡海の記述に対して、喬峯はこれは魯迅の母親を責めたものといわざるをえないが、そういうことはおそらく必ずしも正しくはない、と反駁している（「略講関于魯迅的事情」―「同」）。

(24) 前掲の欧陽凡海によれば一週間であるが、林辰は魯迅逝世三週年の紀念大会で孫伏園が行つた講演に拠つて三日としている。詳しくは「魯迅的婚姻生活」（「魯迅事蹟攷」）参照。

(25) 竹内好氏は弟の周作人が恋愛結婚をしている以上、魯迅にもできない筈はない（「魯迅」）と疑つているが、周家の長男という身分的な制約があつたのであろう。

(26) 魯迅のこの述懐は、林辰の「魯迅的婚姻生活」（「魯迅事蹟攷」）には民国三十三年二月四日、許寿裳が作者に寄せた手紙の一句としても引かれている。なお、許寿裳は『朱夫人是旧式的女子，結婚係出於太夫人的主張』（「西三条胡同住屋」―「亡友魯迅印象記」）と述べている。

(27) 魯迅の旧式結婚に対する見解を更に端的に表明したものとしては「男人的進化」（「准風月談」）がある。

(28) 竹内好氏は「魯迅は「朱女士」を一度も愛したことがなかつたらしい。（おそらく憎んでいたのではないかと私は想像する。）」（「魯迅」）と述べているが、その想像はやや酷にすぎるようである。なお、魯迅の朱女士に対する憎しみを述べたものとしてはわずかに王森然の「周樹人評伝」（「近代二十家評伝」）があるが、これはその依拠が記してなく、またいかにも故事的であつて信憑性に乏しい。

(29) この書の発行者は南京の啓新書局、分行所は上海の普及書局、印刷者は榎本邦信、印刷所は東京並木活版所である（許広平「識」）。なお、原著者を英国威男としてあるのは誤りである。

(30) 「中国礦産志」―顧琅（東大在学留学生）と合編。上海普及書局発行。いま

「魯迅全集補遺続編」（唐弢編）に「中国礦産全図広告」「中国礦産志徴求資料広告」とともに収録されている。

(31) これは叙事には文語、対話には口語を用いた訳法をとり、蔡観雲を通じて商務印書館に紹介されたが、編集者に訳法がでたらめだと言われてものにならず、ついで原稿も行方不明になつてしまつたという。（「魯迅書簡」下、一九三四年五月五日付、楊霽雲にあてた魯迅の返信による）。

(32) 徐錫麟―字は伯蒪、日本留学生出身、魯迅と同郷の紹興の人で光復会会員。帰国後、安徽省の巡警道兼巡警学堂長に任じた。「狂人日記」（「吶喊」）にこの名がみえる。

(33) 秋瑾女士―魯迅と同時の留日学生の一人で、光復会会員。かつて留学生取締規則が発表された時（一九〇五）、彼女は真向うからこれに反対し、小刀を卓上におき、熱弁をふるつて全体帰国を主張した。帰国後、故郷の紹興で革命運動の機関である大通体育学堂を主持していたが、徐錫麟に呼応して紹興に旗をあげんとしたが、ついに捕えられ『秋雨秋風愁殺人』を絶命の句として、一九〇七年六月五日、古軒亭口の丁字街上で殺害された。なお、「薬」（「吶喊」）の殺害された若い革命家夏瑜のモデルは彼女であり、その墓を囲む紅白の花の輪は、たとえ『曲筆』（「吶喊」序）にもせよ、彼女に対する好意的な贈物と読みとれる。

(34) 「新生」の参劃者については、魯迅は『幸而尋到幾個同志，此外邀集了必須的幾個人』（「吶喊」序）と述べているだけではつきりしないが、周作人の「関於魯迅之二」には許寿裳、袁文薮の名があげてあり、更に許寿裳が林辰によせた手紙（「魯迅与文芸会社」―「魯迅事蹟攷」）には許寿裳、袁文薮、陳師曾の名があげてある。従つていま正確に分るのは魯迅、周作人、許寿裳、袁文薮、陳師曾の五名である。

(35) 本書は台湾文化協進会刊、民国三十六年六月初版。その内容は「我所認識的魯迅」及び「亡友魯迅印象記」とそれぞれ重複するが、「魯迅的徳行」及び「魯迅的生活」の二篇は本書だけにみえる。

(36) 「河南」―劉由叔、孫竹丹らを中心に一九〇七年創刊された月刊誌、河南同郷会発行。

(37) ペテーフィ―魯迅がペテーフィに感激したのは、彼がバイロンに似て『縦言自由』（「摩羅詩力説」）、またその『誕放激烈』（「同」）にあつたが、同時に「起て！マジャール人」の作者として、ハンガリー独立の義勇軍に投じ、戦死した彼に共感したのであろう。魯迅はのち一九二五年に彼の詩を「語絲」（九巻一期）に訳載した。

(38) 汪公権―周遐寿「魯迅在東京」（「魯迅的故家」）には汪某となつているが、いま王子壮「魯迅伝」によつて補う。

(39) 「民報」の発禁は日本政府の命令によるが、裏面には清朝政府からの要請があつたらしい。表面の理由は出版法違反、つまり発行人の名義を変更し、その届出を怠つたというのであり、発禁処分の外に罰金百五十円を課せられた。（周遐寿「民報案」―「魯迅的故家」）。

(40) この時の聴講生は魯迅の外に、周作人・許寿裳・龔未生・錢玄同・朱希祖・錢家治・朱宗萊・計八名で、テキストには段玉裁「説文解字注」及び郝懿行「爾雅義疏」等が用いられた。この講義の模様は許寿裳「従章先生学」（「亡友魯迅印象記」）、周遐寿「魯迅在東京」（「魯迅的故家」）、林辰「魯迅与章太炎及其同門」（「魯迅事蹟攷」）に詳しい。

(41) この××及×××はそれぞれ〝告密〟と〝呉稚暉〟に該当する。つまり蘇報事件の密告者たる呉稚暉を章炎太が論難したことを指すという。詳しくは宋云彬「魯迅和章太炎」（「文芸報」一九五六年十月号）参照。

(42) 『中学為体，西学為用』―『中国の学問を体となし、西洋の学問を用となす』は一般には張之洞が始めて唱えたとみられているが、それ以前にも屢々この意味のことが言われている。この句で表現したものとしては光緒二十二年七月の孫家鼐の「議覆開辦京師大学堂摺」に『自応以中学為主、西学為補、中学為体西学為用……』とみえる。張之洞の「勧学篇」には『中学為内学、西学為外学、中学治身心、西学治世変……』とみえる。

(43) 光復会―一九〇四年に成立した革命団体の一つで、会長は蔡元培。その源流は前年留日学生が組織した軍国民教育会である（馮自由「中華民国開国前革命史」―蔡尚思「蔡元培学術思想伝記」に拠つて引く）。これには暗殺団が組織されていたが、一九〇七年徐錫麟が恩銘を刺殺し、秋瑾これに呼応せんとしてともに捕殺された事件はおそらくその一つのあらわれであろう。なお、後に興中会、華興会等とともに中国革命同盟会に吸収された。

(44) 章太炎、陶成章（煥卿）、龔宝銓（未生）、秋瑾、陳伯平、馬宗漢、許寿裳／陶冶公（望潮）、陳濬（子英）らの名があげられている。

(45) 魯迅が支給される学費は年額四百元、毎月三十三元であつた。（周遐寿「伍舎」―「魯迅的故家」）。

(46) 以上の身辺雑記的な事柄は大体周遐寿「伍舎」―「魯迅的故家」によつた。

(47) 周作人は『予才…在東京的独逸語学協会的学校聴講。』（「関於魯迅之二」）と述べ、『魯迅…学籍是独逸語学会的独逸語学校…』（「日常生活」―「魯迅的故家」）と述べている。これは独逸協会学校であろう。なお、これに在籍した年月は不明であるが、許寿裳は『一九〇八年恭我結束了東京高師的課業…一面続習徳文……同往読徳文呀…』（「西片町住屋」―「亡友魯迅印象記」）と記しているので、少くとも一九〇八年には許寿裳と共にこの学校に通つていたことが分る。

(48) 「新序」――これは周作人の名になつているが実は魯迅が書いたものである。(「周作人「関於魯迅之二」参照)。なお、これは唐弢編「魯迅全集補遺続篇」に収録されている。

(49) この翻訳は自費出版のかたちで出されたが、実際の出資者は蒋抑卮であり第一部千冊に千元、第二部五百冊に五百元出資した(周遐寿「哀文薮与蒋抑卮」―「魯迅的故家」)。

(50) 上海の委託販売所は蒋抑卮の経営する綢緞荘であつた(「同」)。

(51) この親しい友人というのは許寿裳である。彼の「雑談翻訳」(「亡友魯迅印象記」)にもこの事が述べてある。

(52) これについては許広平「識」(魯迅全集十一巻)参照。なお宋云彬はこれに関して『魯迅写的文言文―不用説深受章太炎的影響,只要看〃域外小説集〃的几篇翻訳文章…就可以知道。』(「魯迅和章太炎」―「文芸報」一九五六年十月号)と述べている。

(53) 「域外小説集」が十年間に二十一冊売れただけであるという胡適のこの見解はあきらかに間違いである。

(54) 因みに阿英は重印本の新序を署名通り周作人の書いたものとみているが、実は魯迅の筆に成ること前註に説く通りである。

(55) 魯迅がドイツ語を習得した場としては礦務学堂(南京)、仙台医専、独逸協会学校(聴講生)などがあげられる。

(56) 許寿裳は『我和魯迅不但同居,而且毎毎同行,……那時俄文已経放棄不読了,』(「西片町住居」―「亡友魯迅印象記」)と述べている。

(57) 主として周遐寿「魯迅在東京」(「魯迅的故家」)に拠る。なお魯迅が頻繁に訪れた書店は相模屋(本郷真砂町)、丸善(日本橋)、中西屋(神田)、南江堂(本郷)、東京堂(神田)、文求堂(本郷)、郁文堂、南陽堂分店(本郷)、南陽堂本店(小石川)等である。

(58) 魯迅訳を参考までにあげると、「掛幅」(「懸物」)「克萊喀先生」(「クレイグ先生」)―以上漱石、「遊戯」(「あそび」)「沈黙之塔」(「沈黙の塔」)―以上鷗外、「与幼少者」(「小さき者へ」)「阿末的死」(「お末の死」)―以上有島、「峡谷的夜」(「峡谷の夜」)―江口渙、「三浦右衛門的最後」(「三浦右衛門の最後」)「復讐的話」(「ある敵討の話」)―以上菊地寛、「鼻子」(「鼻」)「羅生門」―以上芥川等である。

(59) 周作人は「阿Q正傳」を、悲憤絶望を幽黙(ユーモア)に寄せたものとみて、そこに漱石の手法の影響を認めている。「関於魯迅」参照。

(一九五六・十二・十五)

附・魯迅年譜補遺 ――(日本留学時代)

西暦(中国/日本)〔年令〕	魯迅事蹟	中国文化界の動向	外国文学	歴史的背景
1902 (光緒28/明治35) 壬寅 〔22〕	1月(旧12月)礦務学堂を卒業。 3月(旧2月)江南督練公所から派遣されて日本へ留学。 3月24日(旧2月15日)南京より大貞丸で出発。 4月4日(旧2月26日)横浜に到着。東京三橋旅館(麹町区平河町四丁目)に旅装を解く。 4月弘文学院(牛込区西五軒町三十	②蔡元培を会長に、「中国教育会」章炳麟らにより創立。上海南洋公学の学生ストライキ。退学した学生、教育会の援助により「愛国学社」を結成。中夏亡国二百四十二年紀念会(章炳麟ら)東京で弾圧により散会。 ③「新民叢報」(梁啓超・半月刊)横浜で創刊。 「大公報」(天津で創刊。 「新小説」(梁啓超・横浜市山下町其社・月刊)創刊。⑩ ④〈新中国未来記〉(梁啓超・「新	①『重右衛門の最後』(田山花袋・新声社)⑤ 『三十三年の夢』(宮崎滔天・国光書房)⑧ 『狂人譚』(同)⑨ 〈運命論者〉(国木田独歩・「山比古」)⑫ 正岡子規・高山樗牛死。 ②アンドレエフ『深淵』『蟇』モスクフ芸術座で『どん底』初演。 ③ゾラ死。	①纏足禁止令。 ロシアと東三省条約締結(3) 日本留学生を規定⑩ ②日英同盟成立(1) 東京専門学校、早稲田大学と改称(9) 東京に弘文学院(嘉納治五郎主宰・留学生教育機関)創設。 ③シベリヤ鉄道開通(11)

四）に入学。はじめて許寿裳と知りあう。課業の余暇に哲学・文芸書を愛読し、特に人間性・国民性の問題に注意す。

小説」1～3号）／「海底旅行」（ヴェルヌ・盧藉東訳・「新小説」未完）／『経国美談』（矢野竜渓・訳者不明・商務印書館）このころから林訳小説はやる

⑤「論小説与群治之関係」（梁啓超・「新小説」創刊号）／『原富』（アダム・スミス・「国富論」厳復訳）／『大同書』（康有為）完成。

⑦蘇曼殊、早稲田大学入学。呉汝綸、大学堂総教習。

1903 癸卯 光緒29 明治36

〔23〕

3月頃 辮髪を切る。夏、休暇に一時帰郷。

7月（旧5月）「斯巴達之魂」（「浙江潮」第5期）

10月（旧8月）「中国地質略論」「説鈴」（「浙江潮」第8期）

11月（旧9月）「斯巴達之魂」続編（「浙江潮」第9期）

秋、ヴェルヌ『月界旅行』を訳了、12月（旧10月）出版。この年、許寿裳に贈った写真に『我以我血薦軒轅』と題す。

③「繍像小説」（李伯元・商務印書館・半月刊）創刊(5)／「国民日日報」（「蘇報」関係者発起）創刊(6)／「浙江潮」（浙江同郷会・月刊）創刊(1)／「湖北学生界」（王璟芳・月刊）創刊(1)／「江蘇」（江蘇同郷会・月刊）創刊(4)

これより留日学生による革命的出版さかん。

④『官場現形記』（李伯元・世界繁華報館）／「文明小史」（李伯元・「繍像小説」1号より連載）／「老残遊記」（劉鶚「繍像小説」9号より連載）／「二十年目覩之怪現状」（呉趼人・「新小説」8号より連載）

⑤『近世社会主義』（福井準造・**趙必振**訳・マルクス主義の最初の紹介）

⑥『物種原始』（ダーウィン）『種の起源』馬君武訳）

⑦梁啓超、アメリカに遊び再び日本へ帰る。呉汝綸死。

①『社会主義神髄』（幸徳秋水・万朝報社）／『社会主義』（社会主義図書部）(8)発禁。／「平民新聞」（幸徳秋水・堺枯川・平民社・週刊）創刊(11)／小林多喜二生。／尾崎紅葉死。

②チェホフ『桜の園』

③スペンサー死。

①奏定学堂章程（日本の制度を模した清末学制改革の最後的決定）。／蘇報事件により、章炳麟・鄒容投獄さる(6)

②日露戦雲急を告げ、幸徳秋水・内村鑑三ら反戦を力説(4)／藤村操自殺(5)

③ライト兄弟はじめての飛行に成功。

1904 甲辰（光緒30 明治37）	1905 乙巳（光緒31 明治38）
〔24〕	〔25〕
4月 弘文学院卒業。 7月13日（旧6月1日）祖父介孚公死す、六十八才。 9月（旧8月）仙台医学専門学校入学。藤野先生の講義をうく。はじめ佐藤喜東治宅（片平丁五十二）に下宿、後土樋の松本宅に移る。	帰京の途次、水戸駅に下車し、朱舜水の墓を訪う。 このころ、試験問題漏洩事件及び幻灯事件起る。
③「東方雑誌」（商務印書館・月刊）創刊(1) 「国粋学報」（鄧実・月刊）創刊(1) 「時報」（狄葆賢）創刊(4) 「新小説」（上海新々小説社・月刊）創刊(8) 「教育雑誌」（羅振玉・王国維・商務印書館・月刊）創刊 ⑤『紅楼夢評論』（王国維） ⑥『簡字全譜』（労乃宣） 『英文漢詁』（厳復・新式標点を用いた最初の書物）簡字を奨励す。 ⑦康有為、欧米に遊ぶ。 蘇曼殊、シャム・セイロンに遊ぶ。 馮雪生（？）胡風生。	②小説林社創設。 労乃宣、簡字学堂を創設。 ③「民報」（中国革命同盟会機関誌・月刊）東京で創刊(1) 「警鐘日報」（蔡元培・はじめは「警鐘」）創刊。 ④『孽海花』（曾樸・二十回まで。小説林社） 『惨世界』（ユーゴー『レ・ミゼラブル』蘇曼殊訳・「国民日日新聞」後に陳由已＝陳独秀と共訳・東大陸図書訳印局刊） 『玉虫縁』（アラン・ポー『黄金虫』『碧羅女士』＝周作人訳・小説叢書の一） 『侠女奴』（アリババと四十人の盗賊』薄雲女士＝周作人訳・「小説林」叢書の一） ⑤『静菴文集』（王国維） ⑥『切音字書』（盧戇章） 『伝音快字』（蔡錫勇） ⑦厳復、ロンドンで孫文と会見。巴金生。艾燕生。
①〈火の柱〉（木下尚江・「毎日新聞」(1)〈四日間〉（ガルシン・二葉亭四迷訳・「新小説」(7)） 〈君死にたまふことなかれ〉（与謝野晶子・「明星」(9)） 〈共産党宣言〉（マルクス・エンゲルス・幸徳秋水・堺枯川訳・「平民新聞」(11)発禁。 小泉八雲死。 ②アルツイバーシェフ『労働者シェウエリョーフ』『赤い笑い』『アンドレエフ』チエホフ死。	①〈我輩は猫である〉（夏目漱石・「ホトトギス」(1) 『海賊』（バイロン・木村鷹太郎訳・尚友館(1) 〈青春〉（小栗風葉・「読売新聞」(3) 『海潮音』（上田敏・本郷書院）(10) ②ゴーリキー逮捕、アナトール・フランスら世界知識人の反対により釈放。 『ロシヤ文学における理想と現実』チエホフ生。
①黄興、湖南に革命団体「華興会」組織(1)、長沙に挙兵、失敗(11) 光復会正式に成立。 ②日露戦争勃発(2) 平民社、反戦協同戦線のアッピールをロシアの同志に送る(8) 片山潜、アムステルダムのインターナショナル大会に出席(8) 日韓議定書。 第一次日韓協約。	①孫文、東京へ来り章炳麟らと中国革命同盟会結成(8) 科挙制度廃止(9) 学部（中央教育行政機関）設置。 五大臣を各国憲政視察に派遣(10) 日本政府取締規則に反対し、清国留学生一斉に帰国、上海に中国公学をたてる。 ②日本海々戦(5) 日露講和条約調印(9) 屈辱講和反対国民大会、日比谷焼打事件(9) 平民社解散(10) ③ロシア第一革命。 韓国における日本の地位、国際的に承認さる。

丙午　1906（光緒32 明治39）

〔26〕

3月15日　仙台医学専門学校退学。

4月　ヴェルヌ『地底旅行』（啓新書局・筆名は之江索士）出版。

5月　『中国鑛産志』『中国鑛産全図』（顧琅と合編）出版。

7月（旧6月）帰郷して山陰の朱安女士と結婚、三日にして弟作人を伴い再び渡日。東京伏見館（本郷区湯島二丁目）に下宿す。

秋　宮崎滔天を訪問。

このころ、『北極探険記』を訳すも未刊。

丁未　1907（光緒33 明治39）

〔27〕

春　中越館（本郷区東竹町）に移る。

6月　徐錫麟、秋瑾女士ら殉難烈士追悼の同郷会に出席。この会で范愛農とはじめてあう。

夏　文芸運動の第一歩として文芸誌「新生」の発刊を企画せるもついに失敗。この年『摩羅詩力説』『文化偏至論』および『人之歴史』『科学史教篇』などを書き、雑誌「河南」に発表。（魯迅『墳』題記による。）

秋　許寿裳らとマリア・コンテ夫人にロシア語を学ぶ。

---

①人身売買禁止令(3)
②立憲実施予告(7)
③「月々小説」（呉趼人・月々小説社・月刊）創刊(9)
④『文明小史』（李伯元・商務印書館）
『二十年目覩之怪現状』（呉趼人・広智書局・第五册まで・一九一〇年に完結）
『孤児記』（周作人・後「小説林」叢書の一）成る。
⑦章炳麟出獄し、東京に亡命、「民報」の編集にあたる(6)。李伯元死。
趙樹理生。

①文芸協会成立(2)
『破戒』（島崎藤村・自家版＝上田屋）(3)
『運命』（国木田独歩・佐久良書房）(3)
『坊ちゃん』（夏目漱石「ホトトギス」）(4)
『漾虚集』（夏目漱石・大倉書店）(5)
大杉栄・黒板勝美ら日本エスペラント協会創立(6)
②ゴーリキー『母』
③イプセン死。

①人身売買禁止令(3)
立憲実施予告(7)
新聞条令発布(9)
留日学生一万に達す。
スタイン、新疆探検。
②日本社会党結成(1)
樺太南半日本領土となる(6)
②韓国統監府（初代統監伊藤博文）開庁(2)
列国公使京城を去る。
インド国民会議カルカッタ大会でスワラジ綱領を宣言。

③「小説林」（黄摩西・小説林社・月刊）創刊
「河南」（武人・朱宣・河南留日同学会・月刊）創刊(12)（陽暦では翌年一月二十三日）
④『孽海花』（曾樸「小説林」創刊号・第二十一・二十二回）
『老残遊記』（劉鶚・神州日報社）
『佳人之奇遇』（東海散士・訳者不明・商務印書館）
⑤『紅星佚史』（H. R. Haggard & Andrewlang "The World's Desire" 周作人訳・商務印書館）
『文学因縁』巻一（蘇曼殊・日本齊民社）
⑥『簡字全譜』（労乃宣）出版。
⑦蔡元培渡欧。
蘇曼殊、渡日して「民報」に関係す。
丁玲生。
蕭軍生。
愈樾死。

①徐錫麟・安徽巡撫恩銘を刺し捕殺される。次いでこれに呼応せんとした秋瑾女士も捕殺される。
②全国各地に労働争議、百姓一揆頻発(3)
③ハーグで第二回世界平和会議(6)
韓国、ハーグ密使事件(6)失敗して皇帝退位(7)

①八虞美人草（夏目漱石・「東京朝日新聞」）(6)
八浦団（田山花袋・「新小説」）(9)
八人生観上の自然主義（片上伸・「早稲田文学」）(12)
八平凡（二葉亭四迷・「東京日日新聞」）(10)
②アンドレエフ『闇』『黒い仮面』
アルツイバーシェフ『サーニン』

申戌 1908 (光緒34 明治41) 〔28〕	酉乙 1909 (宣統元 明治42) 〔29〕
4月 伍舎(本郷区西片町十四番地ろノ七号、漱石の旧宅)に移る。この頃から民報社(牛込区新小川町)で章炳麟(太炎)に『説文解字』の講義を受く。(翌年帰国まで)	3月 『域外小説集』第一冊出版(魯迅訳はアンドレエフ『謾』『黙』)
8月以降 ∧裴象飛詩論∨(「河南」第七期・筆名は令飛)、∧破悪声論∨(同第八期・筆名は迅行)を発表。	7月 同第二冊出版(魯迅訳はガルシン『四日』)
この年、光復会々員となる。又『支那経済全書』(同文会編)の翻訳を校正。又周作人と『域外小説集』編訳にとりかかる。このころ独逸協会学校に聴講生として在籍。	8月(旧6月)帰国し、浙江両級(高中級)師範学堂(教務長は許寿裳)の生理学・化学の教員となる。
②北京女子師範学堂創立(6) 上海に世界語講学校創立。	③「小説時報」(狄葆賢)創刊(9)
③「民報」発禁さる。	④「拜輪詩選」(バイロン・蘇曼殊訳・日本三秀堂) 『曲録』(王国維・晨風閣)
④『海上百花趣楽演義』(韓子雲・『海上花列伝』改題) 『何奴騎士録』(ヨーカイ・モル『神は一なり』)周逵=作人訳・商務印書館)	⑥北京に簡字研究会を設く。
⑤∧人間詞話∨(王国維・「国粋学報」一九〇九年まで連載)	⑦陳独秀日本に留学。
⑥労乃宣、簡字の使用法を西太后に説明、『簡字譜録』を奏呈。呉敬恒、「新世紀」(パリにて発行)紙上にてエスペラント問題を論ず。	
⑦章炳麟、国学講習会(神田大成中学)を開く。 許寿裳、東京高等師範学校を卒業。	
①∧文芸上の自然主義∨(島村抱月・「早稲田文学」)(1) ∧奉∨(島崎藤村・「東京朝日新聞」)(4) 『あめりか物語』(永井荷風・博文館)(8) ∧三四郎∨(夏目漱石・「東京朝日新聞」)(9) 「アララギ」創刊(10) 国木田独歩死。	①「スバル」創刊(1) 『ふらんす物語』(永井荷風・博文館)(3)発禁。 ∧それから∨(夏目漱石・「東京朝日新聞」)(6) ∧キタ・セクスアリス∨(森鷗外・「スバル」)(7)発禁。 『田舎教師』(田山花袋・佐久良書房)(10)自由劇場設立(11) 二葉亭四迷死。
②プレハーノフ『マルクス主義の根本問題』 アンドレエフ『七死刑囚物語』 『飢餓王』	
①辰丸事件(排日運動のはじめ)(1) 国会開設期を決定(8) 光緒帝・西太后相ついで急死、宣統帝(溥儀)即位(11)	①国会の早期開会運動各地に起る(12) 張之洞死。
②幸徳秋水、平民社再建(8) 宮下太吉ら行幸途次にパンフレット『無政府共産』配布(11)	②伊藤博文、ハルピンにて暗殺される(10) 東京弘文学院閉校。
③韓国全土に暴動起る。	③韓国、司法および監獄事務を日本に委託(7) ロシア、レーニン『唯物論と経験批判論』

1. 「魯迅事蹟」「中国文化界の動向」「外国文学」「歴史的背景」の四項に分けたが、「中国文化界の動向」は①一般的動向②学校・書店・文化団体③新聞・雑誌など④小説・戯曲⑤詩歌・評論⑥国語運動史⑦文化人の動静・生卒に細分した。「外国文学」は①日本②ロシャ③その他、「歴史的背景」は①中国②日本③その他、に分けた。

2. 「中国文化界の動向」「外国文学」「歴史的背景」の括弧内数字は月を示す。

3. 暦は、「魯迅事蹟」は陽暦に改めたが、「中国文化界の動向」・「歴史的背景」の①は、引拠した資料の関係上、特別の場合以外は陰暦を踏襲した。なお本文もこれ準ずる。

4. 「 」は新聞・雑誌、『 』は単行本、∧ ∨は雑誌などに発表した場合、その下の括弧内は、編著者・出版発行所名・備考などを記した。

5. 本年譜は本文に引用したもの以外に、主として次の資料に拠つた。

「魯迅先生年譜」(雪葦「魯迅散論」、新文芸出版社)
「魯迅業績年表」(志賀正年、天理大学学報)
「魯迅年譜」(「魯迅案内」—「魯迅選集」別巻、岩波書店)
「晩清戯曲小説目」(阿英、上海文芸聯合出版社)
「史料・索引」(阿英、「中国新文学大系」、良友図書公司)
「国語運動史綱」(黎錦熙、商務印書館)

「中国国語運動史年表」（倉石武四郎「漢字の運命」岩波書店）
「中国近百年革命史略」（栄孟源、生活・読書・新知三聯書店）
「曼殊大師全集」（文公直編、教育書店）
「朝鮮史」（旗田巍、岩波書店）
「中国文学月報」「中国文学」（中国文学研究会編、各巻）

――本論文の中、(一)の要略及び附録の「魯迅年譜補遺」は昭和三十一年度「現代中国学会」（京都立命館大学講堂）において発表した。なお、「年譜」は今後更に補訂するつもりである。――